kelo Associated Repository of Academic resources	
Title	オリュンピアのプェイディアス工房
Sub Title	Die Werkstatt des Pheidias in Olympia
Author	相内, 武千雄(Ainai, Mutio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.4 (1968. 3) ,p.67(627)- 100(660)
JaLC DOI	
Abstract	Der sehr erwartete Forschungsbericht uber die Ausgrabung der Werkstatt des Pheidias in Olympia ist schon lange 1964 als I. Teil des V. Bandes der Olympischungen mit dem Titel der Werkstatt des Pheidias in Olympia veroffentlicht. Die Ausgrabung wurde in Herbst 1954 angefangen, beendete man sie aber am Anfang Juni 1958 mit großem Erfolg. Pausanias nannte in der westlichen Gelande außerhalb der Altis ein Bauwerk als die Werkstatt des Pheidias, in dem der Meister alles einzelne des Kultbildes gearbeitet habe. Man konnte fruher schwanken, welches von den beiden hier aufgedeckten griechischen Gebauden gemeint sei, die spatere byzantinische Kirche oder der ihr im Suden vorgelegte schuppenartige Bau. Die Frage ist schon jetzt einfach dadurch entschieden, daß nur das nordliche, also die spatere Kirche in die Zeit Pheidias zuruckgeht. Das Bauwerk ist in der Jahrzehnt 440-430 v. Chr. entstanden, wasfiir der archablogische Befund vor allem mit der Datierung des Pheidiaskannchensfesten Anhalt gibt. Damit wurde nicht nur ein Schlußstrich unter die lange Debatte um das Zeitverhaltnis zwischen den beiden großten Schopfungen des Pheidias: der Athena Parthenos und des Olympischen Zeus gezogen, sondern der Beginn der Arbeiten am olympischen Kultbild sogar noch scharfer eingegrenzt. Der vorliegende V. Band ist in zwei Abschnitten geteilt: in der ersten stellt A. Mallwitz die baugeschtlichen Ergebnissen dar undin der zweiten legt W. Schiering den archaologischen Bsfund, insbesondere die fur die Datierung der Schichten wichtige Keramik vor. Der Verfasser versucht hier nur die Erlauterung zu den Ergebnissen der Ausgrabung, in der Hauptlinie der Darlegung des Mallwitz folgend, doch sogar noch mit seiner eigenen Bemerkungen. Prof. Dr. Emil Kunze, Direkotor des Deutschen Archaologischen Instituts in Athen hat den Verfasser mit den gewinschten, notigen Lichtbildern dazu aufgemuntert. Dafiir sei ihm an dieser Stelle herzlich gedankt.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680300-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

よりも発掘関係者は夙に認識してい た の で あつた。その一人、 査は必ずしも聖地の内外全域にわたつて終つていないことを、誰 ながら、そこには答えられないままに残つた問題のあること、調 明し尽されたかのような印象を与えたかも知れ な か つ た。然し はかようにして、この聖域に関する本質的に重要な問題が既に解 アの美術史に根本的な新しい認識を齎したのであつた。この調査 的な姿が、ここに始めて明らかにされたばかりではなく、ギリシ 大なギリシアの聖地が世紀の流れと共に展開していつたその綜合 かしいものであつたかは、既に人々の知るところである。 に、組織的な調査の鍬をいれたのであつた。その成果が如何に輝 時代からローマ時代にわたる多様の遺構を有するこ の 広 俊秀を団員に加えて、1875―1881の六年にわたつて、アルカイク あつた。彼は建築家 Friedrich Adler の協力を得て Wilhelm Dörpfeld, Adolf Furtwängler, Georg Treu 等の当時気鋭の つたのは Ernst Curtius を首班をとするドイツの発掘調査団で Olympia の聖域にかんする本当の組織的学術調査を初めて行 い聖域 との偉

相内武千雄

W. Dörpfeld は第一次大戦の前後にかけて、小規模の調査を行い、特にこの聖地の未知の先史に新たな解明を加え、又 Heraionい、特にこの聖地の未知の先史に新たな解明を加え、又 Heraion

然し組織的な学術調査を再開するには莫大な費用を要することであつたし、又それには時機を待つ必要もあつた。この待望の時は、一九三六年のベルリン開催のオリュンピア競技大会と共に訪は、一九三六年のベルリン開催のオリュンピア競技大会と共に訪けて、大規模な発掘調査が行われるに至つた。それは一九四二年末まで引続いて行われたのであつたが、第二次大戦の進定期的に毎年、冬期に重点がおかれて遂行されている。発掘再開の成果に関しては逐年、報告がなされ、一九六一年迄に既に七巻を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、又その重要な出土品と発見については、それぞれの研究を数え、ストルールには、このは、日本の大のでは、このでは、このでは、このでは、このでは、日本の大のでは、このでは、このであります。

発掘再開に課せられた課題は大別して二つに分けられる。一つ

オリュンピアのプェイディアス工房

(六二七) 六七

第四十巻

史

をつけたクラッシク時代の層位よりも、もつと深層部にまで鍬を らゆる面から調査することであり、次には、以前の発掘が既に手 には発掘地域を著しく拡大して Altis(神域)周辺の諸施設をあ

であつた。かようにして得られた大きな成果の一つは、オリュン いれて、オリュンピアの古い歴史に対する新しい認識を得ること

き、更にこれが前四世紀中葉の最盛時を語る大規模な施設に発展 更が加えられなかつたらしく、おおよそ前一世紀の末頃 に 至 したのであつた。この第三期スタディオンはその後、極立つた変 な施設から、前五世紀の中葉以前の最初の記念的造営へと移りゆ にされたことであつた。即ち、それはアルカイク時代のささやか

スタディオンの全貌が規模に於いても又歴史的にも明らか

られた。最後の段階はローマ皇帝の中期及び後期の時代で かなり細心に修理されて、その時、観覧席の築提がやゝ高め あ

て、この時代には施設を荒廃から護るだけの試みが再三行われて いるにすぎなかつた。吾々が従来知つていたスタディオンは第三

柱廊によつて区別されたのである。 拡大されたばかりではない。競技場は神域との間に円柱の列 即ち前四世紀の施設である。この時に於いてコースが一新さ 第二期、 即ち前五世紀前半の

ことなく、その終軸は神域にはいつて開いていた。そうして、そ かぶさつて更に南に 10m 拡げられている) コースの長軸はずつ 施設はコース幅が狭く(第三期のコースは一部この第二期の上に と西によって、即ち約 80m 西によって、 しかも何ら遮ぎられる

れは嘗てゼウス祭祀の中心であった骨灰の大祭壇から 余 り 離

から始まつていたオリンピア祭典の発展の帰結であつた。それは ていなかつた。前四世紀の新計画の実施は、既に前五世紀の末期 るに至つたのである。 あろう。この世俗化が遂に競技場を聖なる地域から明確に区別す ことは競技の世俗化が次第に強くなつてきたことに原因があるで つけるという形で働いたと見るべきであろう。然しもつと重要な こゝではこれが、円柱廊によつて神域と一般世俗地域とに纏りを 一つには、建築的に統一した区域を欲する新感情からきている。

dias anus 帝時代の Elis の貨銭の面に施された大ざつぱな浮彫に頼 りでなく、その俤を偲ぶには僅かに Pausanias の記述と Hadri りも、このオリュンピアのゼウス神殿に安置されたゼウス神像に であつた。前五世紀に於いて Pheidias が最も偉大な神像制作者 ことは、この建築年代が、より一層幅狭く、明らかにされたこと て、その建物の構造の可能な復原が示され、そうして更に重要な は Pheidias の工房の確定であつた。この工房の遺址が確められ されていたのはいうまでもない。Pheidias の工房、それはこの るほかはないのである。又神像の制作年代についても、論議がな よつたのであつた。しかもこのゼウス像は他のクラッシク時代の としての名を擅にしたのは、Athena Parthenos 神像によるよ 神像制作の作業場であつた。それ故、この工房 の 決 定 は Phei 大作家の作品の運命と同じように、滅佚して今に伝わらないばか スタディオンにも増して吾々に重要な意義を持つた発掘 の制作活動に関してばかりでなく、ギリシア美術史にとつ の成果

ても大きな意義を有しているといわなければならぬ。

陶器陶片類及びその他の年代決定に必要な出土資料に つい て は は大きな関心事でなければならないであろう。私はこう思つて、 ない。然し Pheidias の活動に興味を持つ者には、この工房決定 これも Kunze の発表を待つてなすのが本当であつたのかも知れ Mallwitz の調査と所見に従つて、やゝ煩瑣の感を免がれない彼 する諸般の事柄、とりわけ神像制作についての諸問題が一層明白 Forschungen の続刊に於いて明らかにする筈である。それ故こ を有する出土資料については、 Emil Kunze 自身が来るべき の制作そのものについて、又像の芸術的性格について重要な意義 加えられている。造像のための土型、用具、廃棄材料など、神像 Wolfgang Schiering によつて、解明が下され、詳細な説明が 建築上の所見については Alfred Mallwitz によつて、又出土 Olympia " と題して、この調査の 研究報告を公表し、地層及び V. Bd. I. Teil (1964) せ., Die Werkstatt des Pheidias in の敍述をおつて、Pheidias工房の決定を伝えようと試ているが、 な解答を得るに至るであろうと期待される。 私はいま 主 と して ついて知るところがあつた。この度 Olympische Forschungen 私は一九五九年十月にこの地を訪れて Pheidias 工房の調査に Kunze の所見の公表によつて、Pheidias のゼウス神像に関

Ħ

オリュンピアのプェイディアス工房

(1) との発掘調査に関する研究成果は次の五巻に纒められている。

Olympia, die Ergebnisse der von dem Deutschen Reich veranstalteten Ausgrabung, herausgegeben von Ernst Curtins uud Friedrich Adler, 5 Bände, Berlin 1890—1897.

Topographie und Geschichte, von F. Adler, E. Curtius, W. Dörpfeld, P. Graef, J. Partsch, R. Weil.

II Die Baudenkmäler, von F. Adler, R. Borrmann, W. Dörpfeld, F. Graeber, P. Graef.

Die Bildwerke in Stein und Thon, von G. Treu.

IV Die Bronzen und die übrigen kleineren Funde, [von A. Furt-wängler

V Die Inschriften, von W. Dittenberger und K. Purgold.

(a) Wilhelm Dörpfeld. Alt-Olympia, 2Bde. Berlin 1935

こ) 再度の発掘報告については

Berichte über die Ausgrabungen in Olympia. Walter de Gruyter, Berlin.

I Herbst 1936 und Frühjahr 1937

II Winter 1937/38, 1938

III 1938/39, 1940

V 1940 und 1941, 1944

Winter 1941/42 und 1952, 1956

VI Winter 1953/54 und 1954/55, 1958

VII Frühjahr 1956 bis 1958, 1961

又研究報告については

Olympische Forschungen, herausgegeben von Emil Kunze und Hans Schleif, Walter de Gruyter, Berlin

Inhalt: Das Philippeion v. H. Schleif und H. Zschitzschmann; Das Nymphaeum des Herodes Attikos v. H. Schleif und H. Weber; Grossgriechische Dachterrakotten v. H. Schleif und H. K. Süsserott; Angriffswaffen v. H. Weber; Eisengerät v. H.

II E. Kunze, Archaische Schildbänder. 1950

II F. Willemsen, Dreifusskessel von Olympia, alte und neue Funde. 1957

IV E. Willemsen, Die Löwenkopf-Wasserspeier vom Dach de Zeustempels. 1959

V (1 Teil) Alfred Mallwitz und Wolfgang Schiering, Die Werkstatt des Pheidias in Olympia. 1964

VI (1 Teil) Hans-Volkmar Herrmann, Die Kessel der orientalisie renden Zeit. 1966

又、Emil Kunze は戦後のドイツの考古学的調査活動を紹介した次の Veue Deutsche Ausgrabungen im Mittelmeergebiet und in vorderen Orient, Deutsches Archäologisches Institut, Verlag von Gebr. Mann, Berlin 1959 のなかで "Olympia"(s. 263ff)と題してオリュンピアの発掘再開の意義と成果、特に Pheidias 工房の決定の意義を強調しながら解説している。本稿校正中に第八巻の報告を入手した。同巻は一九五八年秋から一九六二中る。本稿校正中に第八巻の報告を入手した。同巻は一九五八年秋から一九六二中夏までの期間を含み、スタデオンと武具、就中兜を中心テーマにしている。

(4) Pausanias V. 11, 1.

(5) 容貌についてはベルリン古銭博物館、全容(但し側面観) についてはフィレンツェ古代美術館のものが最も参考にされる。
 Josef Liegle, Der Zeus des Phidias, Weidmann, Berlin, 1957. Taf. I, XVII, XVIII, XIX; Giovanni Becatti, Problemi Fdiaci, Electa. Milano, 1951, Tav. 73—(224); Olympische Forschungen V. I. Teil.

いる。(p. 44f) これがわが国に於ける最初の紹介であろうと思われる。央公論社、昭三八、九は「造跡を訪ねて」のなかで工房の発見について伝えて央の説明が紹介されている。又、村川堅太郎「オリンピア」(中公新書二二) 中は) 註記(3)のなかの E. Kunze "Olympia"に於いて、工房の決定、出土

Abb. 1. を参照されたい。

(7) これを紹介するに当って早くから在アテネドイツ古代研究所 (Das Deutsche Archäologische Institut, Abteilung Athen)の首席理事長 Emil

(天三〇) 七〇

Kunze 博士から許可を頂き、又写真について特別の焼増しを送って頂き又、Kunze 博士から許可を頂き、又写真について特別の焼増しを送って頂き又、ないかと想到して、筆を進めたけれども、報告はすべて長文にわたっており、又の愚鈍にある。結局、できるだけ記載のなまの形で伝えるのが最も適当ではなめかと想到して、筆を進めたけれども、報告はすべて長文にわたっており、又の愚鈍にある。結局、できるだけ記載のなまの形で伝えるのが最も適当ではなある。紹介の時期が甚だおくれてしまったのは、紹介の形式を思い悩んだ筆者をある。紹介の時期が甚だおくれた。博士の深い御好意に心から厚く感謝する次第で、私の大学にある。

I

Pheidias の工房については既に古く Pausanias が記述して

Altis の外側に一字の建物があつて Pheidias V. 15. 1.) Leonidaion に向いあうわけである。(Pausanias V. 15. 1.)

この Pausanias の記述は工房の規模や構造については、何も といった。それ故、引返して Leonidaion に向うとすれば、それ をうして、Leonidaion の南側には、これといつて特別の施設は なかつた。それ故、引返して Leonidaion は神域の境 であった。それ故、引返して Leonidaion に向うとすれば、それ なかつた。それ故、引返して Leonidaion に向うとすれば、それ なかつた。それ故、引返して Leonidaion に向うとすれば、それ なかった。それ故、引返して Leonidaion に向うとすれば、それ なかった。それ故、引返して Leonidaion に向うとすれば、何も なかった。それ故、引返して Leonidaion に向うとすれば、何も

た。当時、論争の焦点となったのは、ごディリ盟をついていいい。当時、論争の焦点となったのは、ごディリ盟をついては考えられなかっ模と部屋割りからいつて、当時既に工房としては考えられなかっ つたに相違ないとして、これを証明しようと試たのである。 Wilhelm Dörpfeld はこれに反して、建物Cが工房の建物であ けであつて、これ以外には存在していなかつたのである。他方、 て、この条件を満たす建物は、この区域では、この聖堂の廃址だ じような規模の建物が必要であると考えたの で あ つ た。そうし したモデルがあつたものと仮定して、それには、神殿の内陣と同 以上の黄金象牙像であつたからには、その制作には、それに相応 址としたのであつた。(Olympia II. s. 93ff)彼は、神像が 12m Friedrich Adler は聖堂の基礎構造を以て Pheidias の工房の る長さ 56m 以上、幅 7m 未満の建物(C)であった。 廻り32, 180m×14, 575m(14, 589m)とこの聖堂の南側に位置す び Theokoleon と古くから呼びならわされている建物、ギリシア 頭におけば、Heroon と Theokoleon であるが、これはその規 た。これらの建物のうち、Pheidias の時代、即ち前五世紀を念 の聖堂の南西隅の方向に位する小さい建物(B)が、それであつ の聖堂の南側に位置する細長い納屋風の建物(C)、それから、こ 時代の切石基礎を有しているビザンツのクリスト教聖堂(A)、こ を発掘したのであつた。即ち北 から順に 数えれば、 Heroon 及 かったけれども、ギリシア時代に属すると見倣される数個の遺址 のなかで、その調査は深層部にまで及ぶという十分なものではな 一八七五―一八八一年の最初の調査に於いて既にこの北側区域 即ち、

(Olympia I. s. 79f)即ち、その納屋風の平面と粗末な建て方が的(A)の立派な建て方、とりわけ、目地の整つた切石組で、し物(A)の立派な建て方、とりわけ、目地の整つた切石組で、したで使用する仕事場には、警沢すぎるし又堅牢にすぎると、映つたに使用する仕事場には、建物(A)は神官のメガロンと見えたのであつた。Adlerの唱えるモデルの必要性は否定されなかつたけあつた。Adlerの唱えるモデルの必要性は否定されなかつたけれども、それには容易に取壊しのきく仮役建物が考えられていた。これに反して、黄金象牙像の各部分の仕事は、建物(C)のなかで行われたとされたのである。

的前後の問題が解決され、次ぎに建物本来の機能が追及されなけ要であった。そうして、その際に先づ第一には、建物相互の年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代に建てられていた。別に強してみてもの決定を証明する確実な証拠は、当時、提示されていなかった。又年代たか、その使用目的も歴史的な変化も明らかでなかった。又年代に対してがある。然し見逃してならないことは、この二つの建物がある。というに関係は明らかでなかった。建物を何に使ったが、というに関係は明らかでなかった。建物を何に使ったが、その際に先づ第一には、建物相互の年代の決定を証明する確実な証拠は、当時、提示されていなかった。というに関係は明らないのでは、建物相互の年代の決定を表する。

オリュンピアのプェイディアス工房

ればならなかつたであろう。

それ故、Pheidias 工房区域に於ける再度の調査は、地盤の成年秋に始まり、それから一九五八年夏にかけて、四回行われた。そうして、その結果は満足すべきものであつた。即ち、従来不明であつたこの地域の地盤の成立が明らかにされて、そうして敷地のた。即ち、これを利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代のた。即ち、これを利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代のある。結果を簡単にいうならば、F. Adler の推定が 正しか つた。即ち、これを利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代のある。結果を簡単にいうならば、F. Adler の推定が 正しか つた。即ち、これを利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代のある。結果を簡単にいうならば、F. Adler の推定が 正しか つた。即ち、これを利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代の志る。結果を簡単にいうならば、F. Adler の推定が 正しか つた。即ち、これを利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代のた。即ち、これを利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代のた。即ち、とれた利用してビザンツ聖堂が建てられたその古代のためであったのである。とした建物では結局、ヘレニズム末期の納屋にすぎなかつたのである。

敷地は殆んどこの全斜面を占めているから、これが建てられるたけられる以前、前五世紀半頃迄のここの地形であつた。(A)のつた。その後、北から押出されてきた砂土がこの谷を埋めて、こ世紀末頃、ここに急峻な崖を残したまま、流れを西に移してしませたれる以前、前五世紀半頃を成したまま、流れを西に移してしましたの北の丘を西から東に洗つて流れている Kladeos 川は、往昔、今日ここから約 100m 西を流れている Kladeos 川は、往昔、

めには当然、埋立整地が考えられなければならなかつた。 (3)

れた古い盛土層である。この層は床よりも古く、基礎よりも新し 用して細長い建物でが出現したのである。 (4)後代に至つて更に西に延長された形で、同様に土留めの擁壁を利 新しい層であつて、そこには更に、今回特に Formenschicht と この擁壁を越すと層は明らかに相違を見せ、E層と名付けられた 故、この層は年代決定に重要な役目を持つていることになる。 場所に先づ、土留めの擁壁を利用して建物Gが造られ、 た、この低地の埋立にも役立つたのである。かようにして、この つたであろうが、かためて、この擁壁の南に棄てられ、これがま たものであって、像の集中的な作業の後ち、それは何回かにわた 分のあたりで著しかつた。この堆積は、神像の制作作業と関係し 等の廃棄物の拡がりが含まれてあつた。これは特に擁壁の東方部 命名された層、即ち神像制作のための衣文土型、使用材料、 て、この間がテラス状に整地されていたことがわかるのである。 層は建物の外、その南に平行に走る擁壁によつて支えら れて い いから、工房建設と直接に関聯していたものと考えられる。 建物Aの内部の比載的薄い床下地盤層が、今回D層と名付けら (G) は それ \mathbf{D}

盃である。これに反してE層乃至 Formenschicht からの出土陶がきは Pheidias 自刻名の黒釉小坏と浮出型文の双手付黒釉皿型部分が凡そ前四四○―四三○の年代を示し、そのなかでも注目するの出土資料である。特に出土の陶器類は、D層の場合には大いのは、これら埋立層

て、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 だった。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたである。 で、これは恐らく(G)に利用されたである。 で、これは恐らく(G)に利用されたである。 で、これは恐らく(G)に利用されたである。 で、これは恐らく(G)に利用されたである。 で、これは恐らく(G)に利用されたである。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。 で、これは恐らく(G)に利用されたであろうと考えられる。

する次の層であつた。そこには黄金象牙像の制作を直接語つてくのを雄弁に物語つている。そうしてE層は、年代的にD層に後続出土している。なかでも Pheidias の小坏はこの層の意味するも出きれていない。然し、D層はこの建物を建てるための埋立整地出されていない。然し、D層はこの建物を建てるための埋立整地出されていない。然し、D層はこの建物を建てるための埋立整地出されていない。然し、D層はこの建物を建てるための埋立整地出

建築物であることを示していたであろうか。 ならば、それは黄金象牙の巨大なゼウス神像を作る作業に適した承の Pheidias の工房であると考えられる。(A)がそうである施設はこれよりも更におくれた。それ故、(A)は Pausanias 伝た。(C)の前身(G)が先づこの層に建てられ、その他の建物れる資料が豊富に含まれていた。Formenschicht がそれであつ

È

- 語つていると思われる。然し、今日、祭壇の址を明らかにすることは出来ない。その目的であつた。それ故、そのついでにこの建物の性格にふれて説明したわけである。彼がここに記しているこの建物のなかの祭壇は、ヘレニズム末期前一と弾物を含めての地区統合計画と関係していたかも知れない。祭壇が設けられるに至つたことは、何れにしても、この建物の使用目的が変化してきたことを物るに至つたことは、何れにしても、この建物の使用目的が変化してきたことを物るに至つたことは、何れにしても、この建物の使用目的が変化してきたことを物るに至った。とは出来ない。と理物を含めての地区に対する新しい統合と思われる。然し、今日、祭壇の址を明らかにすることは出来ない。と理物を含めていると思われる。然し、今日、祭壇の址を明らかにすることは出来ない。と理物を含めていると思われる。然し、今日、祭壇の址を明らかにすることは出来ない。
- 又拡大された。更に三世紀に震災をうけた後、再度の改造をうけた。たものであるが、後ちローマ皇帝 Antoninus Pius 時代に著しく改造され、名称は即ち、との建築家の名に由来するものである。建物は客殿として使用されの) Naxos の建築家 Leonidas によつて前四世紀半に建てられたもので、その

オリュンピアのプェイディアス工房

三三七三七三

建物があつて、その内部の隅に Pan の祭壇が設けられていた」というのは、 同頁anm. 4 又 Pausanias V. 15.8 に「通称 in "Olympischen Forschungen Bd. V" s. 103 anm. 2, s. 105 及以 Olympia in "Neuen deutschen Ausgrabungen" s. 275; A. Mallwitz いつた働きをいう漠然たる Heroen の一人であるからであろう。E. Kunze, 名を指さずに Heros の語が二格で常に書きかえられていつたが、これはとう ち当初の使用目的から離れて、湯殿の神様を祀るようになつたわけである。特に 々たる施設が作られた時であつて、祭壇はこの変化と関聯して考えられる。即 末期、凡そ前一〇〇年頃であつて、西隣りの古い浴場施設が床下暖房浴として堂 建物が Heroon と呼ばれるに至つた。然し祭壇の設けられたのはヘレニズム 掘に際して、この円堂の隅に簡単な土壇の祭壇が発見されて、その漆喰壁にか られたと思われる。この建物が Heroon と呼ばれるに至つたのは、嘗ての発 これが蒸風呂になつていた。その南の前室は釜をわかして高温湯を作るに用 分けた方形の建物であつて、その北側の室が内部を Tholos (円堂) に作り、 ものである。そのプランを見るに西向きに列柱玄関廊を置き、奥を南北二室に ゝれた銘文が無名の Heros に献じられていたが為である。これからしてこの Theokoleon の前に一軒の

"Theokoleon"は Graef(Olympia II. S.110)によつて前四世紀の建物ににされているが、これは誤つた復原によつているからである。彼がこの建物に属するとした柱頭、又今日でもこの壁の内部に横たわつている柱頭、それは大きさからいつてとの建物か Heroon かに属するものであるが、それは前五世きさからいつてとの建物か Heroon かに属するものであるが、それは前五世きさからいつてとの建物か Heroon かに属するものであるが、それは前五世きさからいつてとの建物か II. S.110)に表して Theokoleon を考紀に属する。建物 A即ち Pheidias の工房は建築に当つて Theokoleon を考記してたてられたと思われる。この二つの建物の向きとは異つている。それが、Heroonの方が古いと思われる。 A. Mallwitz a. a. O. s. 14. 及び同頁 anm. 6, s. 103 及び同頁 anm. 2。 Theokoleon はいうまでもなく神官の館を意味するが、元来の使用目的は十分明らかになっていない。既に A. Schwarzstein, Eine Gebäudegruppe in Olympia (1909) は Heroon を蒸風呂施設と見めし、又 Theokoleon を Palaistra と見たのである(Mallwitz a. a. O.

この Heroon を指しているものと思われる。

s. 14 anm. 6.). Mallwitz は神官の事務所がヘレニズム末期にこゝに移され 物Aの南側に沿つて附設した時に、全部ではないにしても取壊された。 Mal. に建てられたものであろう。建物Bの方は建物Cの建設に伴つて、排水管を建 る。両者共に建物Gと関聯する実用建築であつて前四世紀末から前二世紀の間 と思われる。前者は土留めの擁壁の西端に後者はその東端にそれぞれ北接して ないだろうかと Mallwitz は述べている。Mallwitz, a. a. O. s. 105-106 作期間の間をここで仲間と一緒に暮したかも知れない、こういう様に考えられ て、神像制作の監督機関がこゝにおかれたかも知れないし又、Pheidias が制 る。即ち工房建設(A)が明らかにこの建物を考慮にいれているところからみ は既に前五世紀に於いても同様ではなかつた かと 疑問を 出して いるわけであ はその保存事務所がおかれたのではないかと彼は見ている。そうしてこの関係 的は、全部が全部そうでないにしても神域保存に必要な職人の宿泊所か、乃至 その区劃のなかに含めるようなプランが実施されたが、この Peristyl 増設目 たということは殆んど有り得ないだろうと見ている。即ち、前一〇〇年頃に東側 lwitz, a. a. O. s. 67—68, s. 104. いる。前者は 10.60m の方形をなし、後者は 16.00×5.75m の大きさであ 建物Bは時代を同じくする附属屋Tと共に建物Gと関係して建てられたもの Peristyl の建増しが附け加えられて、それが建物Cと連絡し、建物Aをも

(11) 建物Cについては Dörpfeld のみが Olympia I. s. 79ff. でその地誌研究のなかで述べているだけで十分に追及されてはいなかつた。然しその納屋風究のなかで述べているだけで十分に追及されてはいなかつた。然しその納屋風究のなかで述べているだけで十分に追及されてはいなかった。然しその納屋風で、これはづである。ところが建物Aの内部支柱の径は 60cm を出ていないないので、これは小屋組を支える柱としては細すぎる。建物Aの外壁の厚さは腰壁でで、これは小屋組を支える柱としては細すぎる。建物Aの外壁の厚さは腰壁で1.12m であるが、これだけで Adler の主張する建物の高さを直接、証明するわけにはいかない。

よれば、最も早く Leake, Travels in the Morea, Supplement (1846) は多くの研究者によつて意見を異にした。Mallwitz, a. a. O. s. 3 anm. 7 に工房建築をとの二者のうち何れにするかについてとの二人の主張はその後の

その附図に於いて、工房の位置を当時所見の聖堂の遺址に示したのである。 Adler説に賛成したのは Flasch, Baumeister (Denkmäler II. 1070f), H. Thiersch, Ergasteria (Nachrichten von der Akademie der Wissens chaften in Göttingen 3. 1938/9, 6f.), Gardiner, Olympia, its History and Remains, 243f. の各氏である。又 Dörpfeld に代つてその見解を詳しく述べたのは A. Bötticher, Olympia, 319ff. であり、彼につどいてはLuckenbach, Olympia und Delphi, 33 である。又 Trendelenburg, Pausanias in Olympia 及び J. Liegle, Der Zeus des Phidias はとの問題について決定を下していない。新しくは Ernst Meyer, Pausanias (1954) s. 263. Anm 4 (Erläuterung s. 610) が決定を躊躇している。即ち「Pheidias の工房としてクラッシク時代の二室から成る簡単な建物、即ち Altis の西方にあつて、ビザンツ聖堂に変造されたものを大抵はそう名付けている。Pausanias がそう呼んだ建物が事実、とゝにあつたには相違ないが、しかし、この名称が正しいかどうかは決定できない。」

は一九五八年二月中旬から六月初迄である。回は一九五六年一月から四月迄、第三回は一九五七年一月から三月迄、第三回は一九五七年一月から三月迄、第四日) この地区に於ける第一回の発掘調査は一九五四年十月から翌年四月迄、第二

火気をうけた黒つぽい土という具合に種類別されるが、それが又年代的に区別物Aと擁壁との間)、(建物Cの内部)、(建物Aの内部)、(建物Aの地盤狀況と建物Aの位置)の五節に分けて、この地図の敷地の成層関係を物Aを中心にしながら、それと建物Cとの年代決定にこの地質調査を大いに重物Aを中心にしながら、それと建物Cとの年代決定にこの地図調査を大いに重物Aを中心にしながら、それと建物Cとの年代決定にこの地図の敷地の成層関係を調査、検討している。全体的にいえば、この区域の地質は砂土、粘土、陶土、物Aと擁壁との間)、(建物Cの内部)、(建物Aの東側)、(当

出来る。 Mallwitz は地層成立の年代順に従つて、層にAからGまでの記号と与えたわけであるが、A—Cは地山層での区別であり、D—Gが盛土層を示している。それは年代的には建物Cと同じ頃と考えられて、ヘレニズム末期、前一いる。それは年代的には建物Cと同じ頃と考えられて、ヘレニズム末期、前一いる。それは年代的には建物Cと同じ頃と考えられて、ヘレニズム末期、前一の一年頃とされる。との年代を証明するものは、G層出土の浮出文の燻器と燭合(Schiering, a. a. O. s. 267—8. Taf. 92 (a, b,), Taf. 93 (4,5,6,7))である。

物である為、調査の便宣上、西から No. 1—No. 14 までの番号を与えた。然 は浅井戸である。(Mallwitz, a. a. O. s. 14-15). に至つたのであるが、前五世紀に於いては地下水脈が高く、建築地盤として不 や Theokoleon が既に計画ずみか、工事中であつて、餘地がなく、遙か南の とする敷地を何故に択んだかというととである。恐らく、北部では Heroor は盛土整地が行われなければならなかつた。問題はこのような整地作業を必要 やかに傾いていた。それ故、この斜面を占めた建物A即ち工房を建てるために 砂土層が V-5.0m まであがつているが、その擁壁の東西部分の接点あたり 期に流れが移動したものであろう。建物Aのなかで水平に走つている砂土層が ている (Taf. 59. No. 1)。年代的には前七〇〇頃であつて、この前八世紀未 で厚い川床の礫層に違している。この層のかどのとれた陶片が嘗ての流れを示 し、この区劃番号は部屋割りではない)の擁壁よりの ▽-6.50m 余のところ は次のことによつて明かになる。建物Cの No. 4. (建物Cは東西に細長い建 安定であつたがためであろう。その証拠には、ことに井戸が沢山あるが、それ 平らな区域、そこでは前四世紀の半になつて Leouidaion が漸く建てられる てこの区域は南に傾斜しているが、建物Aの南側では更に西から東に向つて緩 では砂土層の上辺が ▽-5.50m、即ち約半メートル低下している。全体とし 斜面を残していつたからであろう。又後ちの土留め擁壁が北折するその西では ▽-5.40m のあたりで急に切れている。これは流れが北の土地を切断して急 し、又この層の上辺、砂土層との界からはオリエント式の初期の陶片が出土し この地区が Kladeos 川の流れの移動によつて南向き傾斜をなしていたこと

(1) 工房の建設には先づその地盤から整地されていかなければいかなかつた。と

オリュンピアのプェイディアス工房

(三五) 七五

る。又地盤の安全に必要な排水工事の出来たのは建物Gと殆んど同じ時であっ 層の盛土が行われて、南に軽く流れる均一の平担な地面が出来上ったので あ がっている形であるから、この控柱が出来る以前に完成したとは 考えられな 地の西及び南の支えとなる。石垣では建物人の基礎の南壁の東端の控柱とつな 囲から目立っていたろう。然しこれと平行して東側前方地の盛土が行われてい 作業が行なわれなかったから、基礎が完成したときは、それは城塞のように周 黒っぽい土層でかぶせていったろう。この層は東側前方地のC層から持ってき たと考えられる。 に結ばれて東西に一線に走る擁壁が出現した。最後に全体の整地作業として上 に \mathbf{p} 層の土を盛って地面をならした(a. a. O. s. 50ff)、かくして両壁が一つ 本来の土留擁壁はこの石垣 β-γ に結び付けられるが、先づこの接点のところ い。(石垣βはγの南端に於いて直角に交わって、それより東に走っていく)。 たと思われる。先づ玉石積の石垣 βーγの線が作られて、これがこの東側前方 って、建物の基礎を仕上げていった。この作業の間、基礎石積の外側では盛土 たものと思われる。その後で、内側だけ盛土を基礎積一段毎に平等に高めてい 側面の基礎積から恐らく開始されたであろう。その最下の切石二層を内外から の建設作業を再現してみると (Mallwitz, a. a. O. s. 53ff), 先づ建物A南

witz und Schiering の "Forschungen" V. I. Teil のつゞきとして発表の制作を物語るものであって重要である。これについては E. Kunze が Mall-の制作を物語るものであって重要である。これについては E. Kunze が Mall-

作る為の土製の流し型である。衣文土型は無数の破片から六十個にまとめられ 見出されて、黄金象牙像の複雑多岐な仕事ぶり、又その出来の荘厳さを想像さ 片、又石膏の塊、赤や青の鉱物性顯料の残り、鉄、青銅、鉛の多量の廃棄物が 料として象牙材、獣角材、骨材の残屑、金箔の破片、ガラス屑、又石英、水晶、 の装身具乃至荘厳具のことは全くないから、この発見は重要である。又使用材 ガラスの純度の高いことを示している。 Pausanias の記述のなかにはガラス 見られるものもあった。そのなかでは細身の棕櫚葉文の如きは実に実しく、又 文、棕櫚葉文、忍茎文が見出される。又出来上り品で何かの理由で棄てられたと の彫刻像のそれに後続するものを示している。ガラス流し型はそのなかにガラ リスの女神像の衣に属するものもある。この衣文の起伏、流れは Parthenon は明らかに女性像に属する衣文型も現れている。即ちニケ、或はホーライ、又カ られているのもあった。その多くはゼウスの衣に属すると見られるが、なかに たが裏側は平らで、表側は明らかに褫褶を示し、なかには縁より文形が高く作 ゼウス像の芸術的性格を語る資料としては衣文鎚造の土型とガラス製植物文を Ausgrabungen"の,,Olympia"の章のなかで概説している(ss. 280—295)。 すものがある。用具としては截金用と思われる骨製刀、鎚箔の青銅のシが見出 黒燿石(黒燿石のなかには穿孔や鋸の痕が残っているのもあった)の残屑や破 スの殊負物があったことから明瞭に証明されている。葉柄を意味する星型三角 される筈であるが未だ刊行されていない。但し、彼は既に "Neue Deutsche

(5) Forsmenschicht 出土資料 は直接に 黄金象牙像の制作を物語る重要なものである。これと共にD層及びE層出土の陶片資料はこの盛土層の年代的資料をされた Pheidias の自刻銘小坏は最も重要である。それは片手堅条黒釉の小坏であって底裏に ФEIVIO = EIMI と目ら刻して所有を明かにしている(三線のハイフンをいれていることに注意する必要がある)。口辺及び把手が欠けているが、それでも姿よく品がある。現在高 7.7cm, 底径 6.3cm 陶土は赤みがかった皮革色、底裏では欠釉して地肌を出している。アッテイカも系乃至エリス系と考えられる。年代は前四四〇一四三〇。この種の容器は金属器に始まるが、系と考えられる。年代は前四四〇一四三〇。この種の容器は金属器に始まるが、系と考えられる。年代は前四四〇一四三〇。この種の容器は金属器に始まるが、系と考えられる。年代は前四四〇一四三〇。この種の容器は金属器に始まるが、系と考えられる。年代は前四四〇一四三〇。この種の容器は金属器に始まるが、なった皮革のを関する。

のあるふくらみを持っている。)が注目される。年代は前四三五を恐らく下らなれを携帯して使っていたものであろう。そうして恐らく工房の建設作業中に破れを携帯して使っていたものであろう。そうして恐らく工房の建設作業中に破別して築てられたのであろう。(Schiering, a. a. O. S. 140f. s. 151. s. 169ff) Pheidias 刻銘小坏と共にD層の年代決定に重要なのは、双手黒釉浮型棕櫚損して築てられたのであろう。(Schiering, a. a. O. S. 140f. s. 151. s. 169ff) 解決 であって、特に工房と南側擁壁との間で発見されたもの(高 4.2cm 常用器というようには考えられない。恐らく Pheidias は献酒用又飲酒用にて常用器というようには考えられない。恐らく Pheidias は献酒用又飲酒用にて

いものと思われる。 (Schiering, a. a. O. s. 182ff. Taf. 66(1))

片手碗 (a. a. O. s. 191ff), スキュポス類(a. a. O. s. 187ff), 燭台 (a. a. の層の年代をしる為の類型的な陶器類としては、皿、特に輪郭の 賑 か な 姿の で建物Cの東半分の南側、C7-8の下では上記のような神像制作と直接、結び のなかで飛散していることなどから十分に証明されるであろう。この層のなか 全体の様子からこの層の統一性がわかるのである。例えば同一器物の細片がこ idaionの方に走っているが、一部では自然土の地盤の上に(建物Cの西半分)、 としては色は一様ではない。そうして この 層は 土留の 擁壁から 南に Leon 銅屑、大理石砕片等を含んでいて、一部は焼土色の黒色をしているが、層全体 業が終った年代というよりも、積土整地されていった年代を示すものであろう。 ある (a. a. O. ss. 217-18, Abb. 62 Nr. 12,13) この年代は神像制作の作 O. s. 200ff), 巾着型小壺 (a. a. O. s. 208ff), 塩皿 (a. a. O. s. 225ff) された。これを Formenschicht として特別に扱っているわけである。こ つく衣文土型類、ガラス、黒曜石、象牙等、等の残りものがかかたまって見出 特に Kleophon 画家の陶片である。一つはキターラ歌手に樹枝の冠を与える 然し大部分の出土陶器類は前四三〇年頃を示している。なかでも 赤 絵 陶 片、 などである。そのうち年代の最下限を示すものは前四一○頃と考えられる皿で フイレンツェのムセオ アルケオロジコのスタムノス (Inv. n. 4006),即ち Be azley 主張のクレオポン画家の初期の作 (Beazley, A.V. p. 420, n. 5) べく走り寄ってくるニケを絵描けるもののクラーテル断片であって、 部ではもっと古い積層の上に(建物℃の東半分)のっている。然し出土品の E層は煉瓦や鋳物の炉の残滓、加工した骨材、顔料、鉄の薄い細い延鈑、 (Schiering, a. a. O. s. 214ff), 竪条文 黒釉坏(a. a. O. s. 169ff), 明らかに

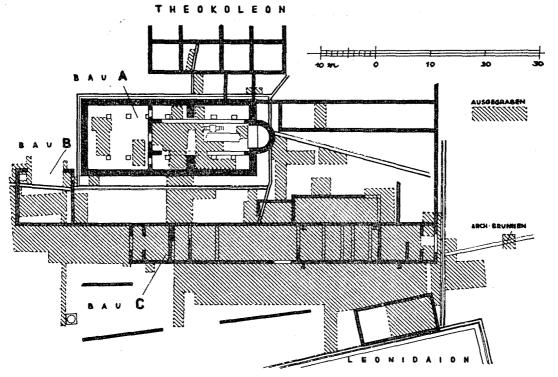
オリュンピアのプェイティアス工房

ARV. p. 695. n. 5)(Corpus Vasorum Antiquorum, Italia XIII-Firenze, Museo Archeologico (II) Tav. 56(3) ここではポリグノトス系の作にしている)と同じ図柄であって、Kunze が ,,Olympia**(s. 294f) にの作にしている)と同じ図柄であって、Kunze が ,,Olympia**(s. 294f) にの作にしている と同じ図柄であって、Kunze が ,,Olympia**(s. 294f) にの作にしている青年の側面像の一部を示しているものである。(Schiering, a. a. O. s. 251f. Taf. 82 (A1-2)) もう一つは左半の顔面をみせて左肩に外衣をおうている青年の側面像の一部を示している断片であって、同じくクラー衣をおうていることはこれに合う口辺(棕櫚葉とが状文の二方連続文様)が見出されていることがら証明される、同じく同画家前四三〇年頃の作と考えられる(Shiering, a. a. O. s. 253-254, Taf. 83 (B1-6)) Kleophon はParthenon のフリースを勉強し、それに啓発され、誰よりも Pheidias の精神を体得した画家だとされているが、これ以外にもアツティカ系陶画の前四三〇一四二五年の陶庁が見出されている。このことは Pheidias と彼がつれてきたアツティカの側作者たちがこゝに居た という ことと関係していたであろう (Schiering, a. a. O. s. 248f)

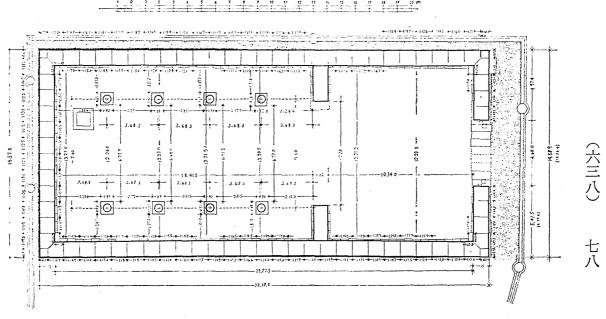
同じアツティカ系絵陶片であっても、工房建物の東及び東南のC層及びD層同じアツティカ系絵陶片であっても、工房建物の東及び東南のC層及びD層にだいて散乱して見出されたものは年代的に Kleophonをび工房建物のD層に於いて散乱して見出されたものは年代的に Kleophonをが、又E層出土の赤絵陶片で最も古いのは、退治したメドウサの首を誇らしげに右手に掲げるベルセウスを絵描いた皿である。然しこれはアテナイで修業したエリスの作家の作と鑑定される。前四四〇年頃。(Schiering, a. a. O. ss. 259—261, Taf. 88. Abb. 68(8)) これらは色々な意味で重要である。

(6) 井戸(Mallwitz, a. a. O. s. 40ff)は建物Aの西壁の北西部に近接しているわけであるが、この壁との関係、又室内の内部支柱の礎石との関係から、井戸の作られたのは壁の築造と殆んど同じ時代、但し、土台の基礎壁が出来てからと考えられ、又内部支柱の礎石は井戸よりもおくれて置かれたと見られる。井見える。井戸は深さ約 4m, 石灰質凝灰岩の井桁の一部が見出されている。井見える。井戸は深さ約 4m, 石灰質凝灰岩の井桁の一部が見出されている。井見える。井戸は深さ約 4m, 石灰質凝灰岩の井桁の一部が見出されている。井のなかから発見されたスキュポス(Schiering, a. a. O. s. 187ff. Taf. 67.(6) 高 9.4cm 底径 8.3cm)は前五世紀末の直前と年代づけられること

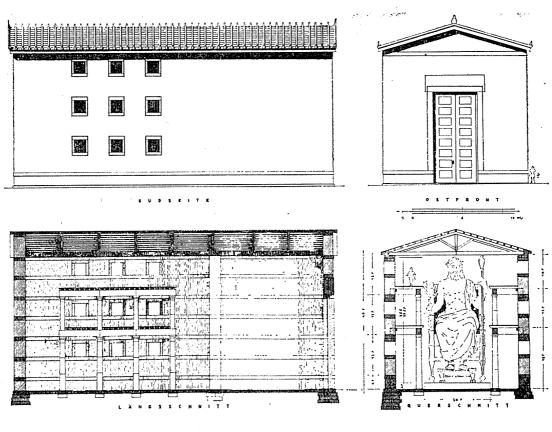
(六三七) 七七



1954-1958の発掘(斜線部分)



ビザンツ聖堂遺址 (基礎)



プェイディアス工房復原図

六三九) 七九 II

たのか、どうもその点、十分説明されていないのが遺憾である。

うな過程は Mallwitz の調査によって理解される。然し井戸が何故に残されたのは、このに、そうして、これは前四〇〇年頃に至って埋められた。このよめった設備と思われる。そうして床の Poros の舗石がはられるときには埋めあった設備と思われる。そうして床の Poros の舗石がはられるときには埋めるの建設工事開始以前乃至工事中に設けられたものであって、工事と関係のされているものであるが(これについては Mallwitz, a. a. O. s. 42ff) 建されているものであるが(これについては Mallwitz, a. a. O. s. 42ff) 建

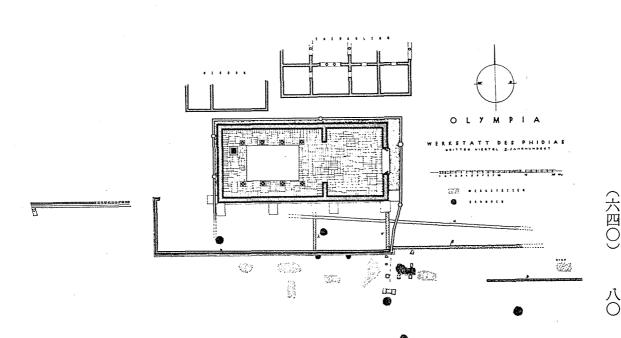
たか、しかも、それは神像制作とどのような関係に於いて残される理由があっ

られる鋳物炉二基、及び焙焼炉一基、これは共に間仕切の張出壁の近くで見出

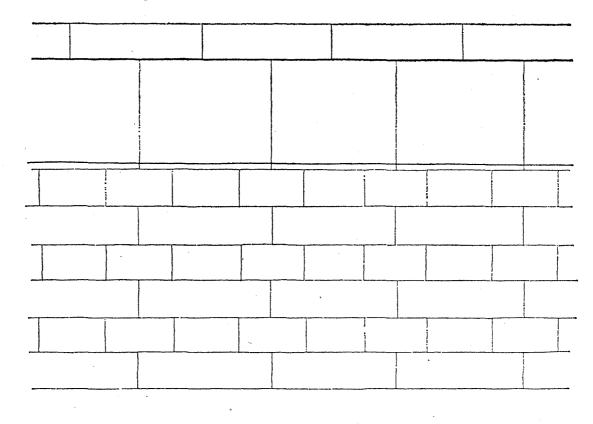
よってこの頃埋められたものと考えられる。然し、井戸の設備と関係あると見

Orthostaten の見事な下端の見切縁をなしている。) Toichobat 約6cmとび出していた。 ていたにすぎない。 あつた。その上当初、Orthostaten には大理石ストゥッコの化 に出ていたけれども、外では一部で、特に南側で地面より上に出 十分に首肯されるのである。 (18)作業場建築として一見、贅沢すぎるとして、これを排したことが 粧塗がかけられて、目地が隠されていたのであるから、恰も、こ staten よりも 3cm_とび出し、そうして、Orthostaten の下端 して廻つている。(恰も基壇の葛石の如くである。) これは Ortho 合せにして作り、その上に高 32cm の同じ幅の切石層が見切縁と につゞく Orthostaten は高 96cm 幅 1.15m のまでで、切石を腹 には水切の刳が縁取られているから、腰壁の構成は見事なもので ゝに芸術的要求が託されたかの如くであつたろう。Dörpfeld しかし、 それは Orthostaten の外面よりも (それ故、建物の南側では、これが

ているところに由来したであろう。勿論、個々の石の計測値は必 Orthostaten のそれは二八、短辺ではそれが一三、そうして、 則正しく作られた。即ち、石の個数からいえば、建物の長辺では taten の厚みがこの数に応じていて、又壁の厚みがこの二倍を数 ていたことはいうまでもない。そうして、石の幅乃至長さは小口 無論、上端見切縁の石幅は同じであるから、その数もこれに応じ ずしも一致していないが、全体としてみれば、腰壁は合理的に規 積つなぎ石の石幅 57―58cm を基礎にしている。即ち(Orthos この腰壁の見事さは、しかし、数的尺度を基礎にして構成され



アスの工房 (B.C.5. 創建当面)



ンツ聖堂遺址の基礎及び腰壁(南側)

る。 Orthostaten の高 96cm はちようどこの三倍に当あつて、Orthostaten の高 96cm はちようどこの三倍に当

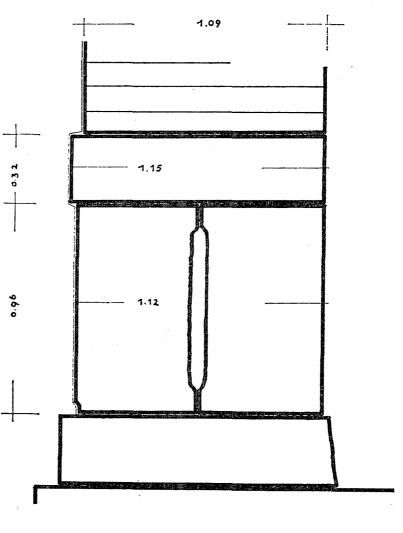
cm は基礎の各積層と見切縁の高さに於いて求められる数値で

の長さが又、同じくこの二倍である。他方、石の高さの32-33

える。Orthostaten 上端見切縁、又基礎の長手層のそれぞれ

落ちこみ、建物の西側では、その南の隅はその北隅よりも低い。 高いのは建物の北東隅であつて、そこから北側では西に向つて 物は異常に歪んでいるのである。 Toichobat がこの水準位の ち、互に隣する石がぴつたり接着し合わなくなつていくと思わ る。そこにこの建物の腰廻り石組の矛盾した特性が窺われる。 偏差を明らかにしている。即ち、 Toichobat の水準位の最も われている。基礎組に示されていた周到な配慮にも拘らず、建 れるからである。しかし、最大の変則の一つは levelling に現 度ではあるが、入口に於いても認められる。このことと鑿が一 直角におかれていない。それは特に北側に於いて著しく、又軽 いるのであつて、建物の内部に於いては寧ろ不規則性が見られ こんでいるわけであるが、これに伴って建物の四隅は一つとし 最も傾斜度の著しいのは東側であつて、西側のように南隅に向 つている。全体として、「Toichobat は北から南に向って落ち つて傾いているが、その北端と南端では 12cm 以上の開きを持 つも使用されなかつたこととは係わりがあるかもしれない。即 建物の内部では Toichobat の石が壁の面に対して必ずしも しかし、このような合理性は建物の外観に於いてのみ働いて

(六四一) 八一



(Toichbat と Orthostaten) 断面

や、むくみ(2cm 弱)、南壁は著しく、

では壁づらは一線をなしている―

-南北両壁の歪み

しとと

即ち外方に、や

肉眼でわ

である。即ち、北壁は北に向つて、

が見られる。即ち東西の両正面は別として一

される。しかし、他に、これでは説明の出来ない歪 る。上記の四隅の水準位偏差は地盤の関係から理解 では大きな割れはないが、その代り目地が割れてい 西隅の石は 2cm 近くもの亀裂を持つている。東側

高い。この沈下現象は既に工事中に始まつていたらしい。そうし の Orthostaten の上端のかどは、この南端のそれよりも 14cm 上構のすべての石をもこれに巻きこんでいる。例えば、西側北端 て同一水平面に位していないのである。この歪はその上しかも、 Toichobat の石ー これは軟かい 地盤と関係していたであろう。その傷痕は -所謂、貝殼石灰岩であるから、湿りを含む

もないから、その原因は、工事中の何らかの怠慢にあつたのでは るとしても、それは南方向に働いたはづであり、 る。そうして、この曲線に Orthostaten も従つているし、顕著 向ではなかつた。又、実際には精確な曲線が描かれているわけで に従っている。元来、建物内部の築土は基礎に横圧を働かしてい には Toichobat も、又、基礎の最上層も軽度ではあるが、これ 遂に両端を結ぶ直線から 8.5cm のづれに達してい このように北方

らみれば、七番目の石から始まり、八番目の石に於 る。南壁のこの異常な歪みを上端見切縁を以て外か ら室内中央にかけて、内法幅約 7cm 減を起してい 寸法でみれば、 12.27m から12.205m 即ち、

西か

曲線を描いている(8.5cm)。これを壁間内部の内法 かる程に、内に向つて凹み、即ち、北に向つて強い

いて急に高まり、更に中央に向ってその度を増し、

、天四三)

ともろくなる――に現れているのであつて、その南

ないだろうか。

内部空間の歪が不注意な作業の結果であるとすれば、同様のことは内部の支柱排列に於いてもいえる。間仕切の張出壁(壁の厚とは内部の支柱排列に於いてもいえる。間仕切の張出壁(壁の厚と酸が見られた。これは、明かにこの空間を三廊形式に規則正し柱礎が見られた。これは、明かにこの空間を三廊形式に規則正しく割るつもりであつた。然し、礎石は列軸に於いても長壁との開けであった。

本のような内部に見られる不揃を Mallwitz はこの建物の性格からきていると考えた。即ち、内部空間は神像制作という機能目的に副つているととが第一であつて、そこには、恐らく外観に目的に副つているととは、当時の建築として尋常ではないが、仕開きになつていたとは、当時の建築として尋常ではないが、仕開きになつていたことは、当時の建築として尋常ではないが、仕開きになつて、そうして内部の床に移つていく。——内部の床はとすれば、理解されてくる。こゝでは Toichobat がそのまゝ沓事場の空間を出来るだけ明るく広くとろうとしたところから来たとすれば、理解されてくる。こゝでは Toichobat がそのまゝ沓事場の空間を出来るだけ明るく広くとろうとしたところから来たまではれば、理解されてくる。こゝでは Toichobat がそのまゝ沓事場の空間を出来るだけ明るく広くとろうとしたところから来たまでは、当時の建築としておいて、そうして内部の床に移つていた。それ故、内部の床はを選組の最上段石組の上端と略ぼ Toichobat 分だけ低くなつていた。

考えられることは、彼自身の自刻名の小坏によつて証明される。この建設に当つて、Pheidias 自身、その初から関係していたとこの工房はゼウス神像を制作するために建設された。そうして

考えられる。或はもつと早くからであつたかもしれない。そうし のと、又この像の神殿内での納まり工合であった。(※) の仮定を設けて、復原を試るのである。そうして、この仮定の根 ようにして、Mallwitz はこの工房建築のために次のような五つ 作業そのものと密接に関係し合つていたのではないだろうか。か 神殿内陣の円柱列に倣つたというのではなく、むしろ、像制作の 作と関係していたに相違ない。主室に見える二列の柱礎も、たゞ 彼の脳裡に絵描かれていたであろう。工房はこの機能を満たすた 事の量も、十分彼にはわかつていたであろう。既に仕事の順序は かつていたであろう。それを制作するに当つての仕事の種類と仕 画かれていたであろう。その像容も、その法量も、彼には十分わ て、Pheidias には既に制作すべき神像の具体的な姿が早くから それがいつ頃かは恐らく、敷地の地形固めの時には確実な事実と 底に横たわつていたものは、安置された黄金象汚の礼拝像そのも 伝統的なメガロン風平面に見えるこの建物の部屋割りも、 めに、恐らく彼の意図に従って建てられていったであろう。一見、

彼が設けた五仮定は次の如くである。

- 1 工房のなかに原型乃至礼拝像そのものがあつた。
- ばならなかった。 2 工房の部屋高は少くとも 13, 08.8m 即ち四○足長でなけれ
- 帯梁がいれてあつた。
 3. 壁は日乾煉瓦積であつたとすれば、それには相当数の石の
- 4 屋根組はトラス構造であつた。主室内の支柱は屋根組と関

オリュンピアのプェイディアス工房

一 八三 八三

史

係がなかつた。

段に重なり、床層をいれて、すべてで三層になる。
5 この支柱は作業棚(足代)に属している。作業棚は上下二

程度の大きさで足りたのである。像心をなす木心像は、しかし単 も、大きさでは完成像と同寸である必要はなかつた。それは相当 牙がそれにはられて完成されたのである。木心像は原型像によつ である。Mallwitz も Adler と同じく、原型像がこゝにあつた 12m に余る巨像をいれるにふさわしい平面規模を有していたの この工房内にあつたと考えた。一方、ビザンツ 聖堂遺址はこの この原型像は、神殿に安置された礼拝像と同じ大きさを有して、 を排して、建物Cにこれを求めたのであった。これに反して、 制作の部分作業であつた。像全体の仕上げの綜合的作業は、そこ ではない。それは、これに黄金象牙がはられれば完成像として出 なる木骨像ではない。それは、像の胎内にいれた単なる木の骨組 大事な点では、完成像と一致していなければならなかつたけれど あつたのであるから、プロポーションのような芸術的性格を示す て作られた。それ故、原型像は木心像を作るための手本の雛型で から、この場合にも、まづ、木心像が作られ、そうして、黄金象 であるとは考えなかつた。黄金象牙像とは木心黄金象牙像である と考える。然し彼は必ずしも、礼拝像と同じ大きさがこれに必要 Adler は部分作業で あつ ても原型像が必要であり、そうして、 に記されていなかつた。それ故 Dörpfeld はビザンツ聖堂遺址 Pausanias の記述に従えば、Pheidias 工房内の作業は神像

空間はこの巨像を収容する高さと幅を持ち、又、その制作のため が工房内で行われなければならないとする。それ故、工房の内部 出来上つた木心像にはられていつたであろう。これらの個々の作 ら、像の各部を分けて制作が行われたであろう。そうして後ちに の部分作業と組立作業に便なる空間の広さと設備が要求されてく あることを要求しなかつたけれども、完成像としての試しの組立 行われた。かようにして、Mallwitz の原型像は礼拝像と同寸で 行われたのである。しかし、究極の組立と仕上げは神殿のなかで 正され、補正されるためであつて、終始それは分解し得る状態で これは飽くまでも試しであつて、わるいところ、拙いところが訂 内に於いても、最終的吟味のために、全体像の組立が行われた。 座の上で全体の組合せが行われて完成されたのである。それ故、 行われた。出来上つた個々の部分は神殿内に運ばれて、こゝで台 業は工房内で行われた。しかし最後の全像の仕上げは、 れていったであろう。黄金象牙の細工も別に作業が進められて、 組合されていつたであろう。玉座もまた、このようにして制作さ 神殿の内部での作業は最終的組立て作業であつた。しかし、工房 を振つて造形的形成をなしたであろう。勿論、像は巨大であるか 作り、そうして、それに厚板を寄合せていつて、それに木彫技術 きは肩幅が 3,50m とされるから、肋材のようにして胴体の形を ものとしなければならない。たゞ像の大きさを考えれば、 来上るのであるから、もう既に木彫像として十分出来上つていた 一木像の如きものではなかつた。少くとも、例えば、像の胴の如 神殿内で

ある。 40F, 13.088m を仮定して差仕あるま とゝに同大の台座がおかれて、像心が組立てられて安置されたろ 40F 13 088m と反定して善士あるまい。 井高は像丈に台座高(2F)を加えたものよりも僅かばかり高く、 を略々示しているばかりでなく、その二列の柱礎によつてかこま で幅 12.27m 奥行 18.415m の主室は、それ自身既に2:3の比 容が正礎にこれを伝えている。像は工房内に於いても台座に安置 その比は 5:4であつて、既述のフィレンツェ蔵のエリス古銭の像 Eを以て示す)。Pheidon 尺度を用いれば、1F は 327.2mm, 1E た。それは恐らく凡そ 2F, 65.4cmで あつたろう。かくして、天 れた中央部分が、神殿内の台座に略々見合う広さを示している。 大いさに匹敵する空間を主室内に見出すことができる。即ち内法 高さは 1.09m であつた。工房内に於いてわれわれは、略々この 台座は 20F×30F, 即ち 6.544m×9.816m の大いさを有して、 されたであろう。Kallimachos の伝えるところでは、神殿内の は 490.8mm であるから、像丈は 12.27m, 椅子高は 9.816m, に坐して、 Kallimachos 尤も台座の高さは必ずしも神殿内と同じである必要はなかつ (31)(これからの記述に於いては、足長をFを以て記し、肘長を(これからの記述に於いては、足長をFを以て記し、肘長を なお、 その頭を椅子の上に五肘長だけ出していたので によれば、ゼウスの巨像は高き三○足長の玉座

なる工房の建築空間が与えられた。困難は日乾煉瓦積の壁体がた奥行 18.415m の主室と、同じ幅の奥行 10.340m の前室とからかようにして、われわれには天井高 13.088m にして幅12.27m,

オリュンピアのプェイディアス工房

れていたとする。その場合、壁の厚さから考えて、それは木材の 壁構造に注意する。そこでは日乾煉瓦積の壁が一定間隔で帯梁を らせた他の理由は、内部支柱の柱の高さにあつた。それは 7-8m にも一定間隔で帯梁がまわり、それによって壁体の強度が高めら 示しているのである。彼はこれによつて、工房建築の日乾煉瓦壁 又それは、漆喰仕上げをかけてない家では、そのまゝ階の高さを てしてあるが、新しい家ではコンクリートの平縁となつている。 いれているのである。そうして、その帯棒は旧い家では木材を以 て Mallwitz はペロポンネソス地方で今日でも見られる民家の の天井高さは側廊の壁高さで満足しなければならなく、同時にこ 柱列の上にのるアーキトラーヴが間仕切の張出壁の壁端と殆んど を出ないと考えられたからである。然し彼の案の第一の矛盾は、 想定しなければならなかつた。Adlerをしてこのような構想に至(%) よるところの復原案は、十分な解決とはなり得ない。こゝに於い れは、間仕切の張出壁と矛盾してくる。それ故、バシリカ形式に にのみあつて前室には設けられていなかつたのであるから、前室 一緒になってしまうことである。更には何よりも、柱列は主室内 して、必要高さを身廊部だけに要求して、バシリカ形式の建物を この疑問は当然、提起される。Dörpfeld は壁の弱体を指摘して、 屋根の荷重を加えて考慮にいれなければならないのであるから、 の高さの空間を支持するのに 十分であつたで あろうか。 巨像と同寸の原型像をいれる空間を排した。Adlerもこれを考慮 基部の腰壁に於いて 1.12m の厚みがあつても、 まして

(六四五) 八五

と帯梁とは棚梁によつて緊密に結ばれて、壁体の強化に役立つて なかで帯梁を受けとしてその上にのつていた。かくて、内部列柱 て共に支柱の柱頭にのつていた。棚梁はまた、壁に対して、壁の ていた。アーキトラーヴもこの棚梁も共に石材からなり、そうし るアーキトラーヴにのり、他方では壁と柱とを結ぶ梁の上にのつ 壁との間には棚がはられていた。この棚は一方では列柱の上を走 の有機的関係を見出そうとしたのである。即ち、内部の列柱軸と であろう。Mallwitz 窓の楣石と窓敷居と関聯し、又内部の作業棚の階と関係していた 帯梁ではなく、 も応じていたわけである。 いた。それ故、帯梁の数は、 石の帯梁であつたであろう。又そのまわし方は はこゝにギリシア建築一般に見られる構造 棚によって分たれた階層分に少くと

なければならぬ

この三階層に応じていた。それ故、棚高は両者を呼応さして考え

棚は二段であるから、空間は三階層に分割される。

壁の帯梁は

は えられ、 あつた固定足代であつた。 12m に余る巨像の制作組 立 アバクスに、上層の柱の底径が適合していた。それ故、棚は二段 柱高は、 む二列の支柱はこの左右の固定した作業棚の棚柱であつた。その にはられていた。 た柱頭の調査によつて、柱は上下二段にわかれ、下層の柱の柱頭 棚は作業棚として考えられる。それは巨像制作のために必要で 足場が必要である。それには移動足代も― ―用いられたに相違ないが、固定足代もあつた。台座をかこ その上を走る石のアーキトラーヴの上にのつていたわけ 総高さ平均7.50m, 皷胴の平均丈 1.435m, 又見出され 見出された皷胴とその径、 即ち、 ドリス式柱頭の四本の石の円 柱 列 及び遺されている柱礎から計 特に像の前後で には当 K

はられて、それが棚床を形成していたであろう。 である。(第三階層の柱は考えられない)実際には、 更に厚板が

て平均 帯梁が 層の棚高は上層のよりも、床から基部の上端までの分だけ、 1.00mか、やゝこれを上廻る数字が見込まれてくるのである。下 はこの両者の高さを加えねばならぬ。柱頭の高さは起部から計つ とアーキトラーヴの上にのつているのであるから、棚高を知るに ら、それは五個の皷胴から成つていることになる。棚は更に柱頭 柱の平均総高さは 7.50m 一個の皷胴の平均丈 1.435m であるか うすれば、帯梁は の高さを計算するならば、それは壁の総高さ 40Fの 1/10, 4F はこれよりも低かつたから、この場合、この点を考慮して基 のでなければならぬ。腰壁の高さは 1.28m であるが、内部の床 の上に積まれた。それ故壁高は 上層では二皷胴からなる柱身が棚を支えていたであろう。 なつていくはづである。それ故、下層には三皷胴からなる柱身が を上廻つたであろう。こゝでは 2F=65.4cm とされる。 される。日乾煉瓦壁はそれ故に 36F の高さであったろう、 壁の総高さは 40cm 乃至 50cm, アーキトラーヴはやゝ大きく 60cm 12F の間隔でおかれたとすると、これは棚梁の受けでも 40日である。 12F 毎におかれていたのである。一方、円 しかし、日乾煉瓦壁は基部の腰壁 40F から基部の高さを除いたも 一方、 両者で 部

れる。 梁の位置($^4F+12F+12F=28F$)にあたる。入口の楣石は、入高さは凡そ $^{(8)}$ のかって。これは恰も上段棚の高さに応じる帯 棚床を計算にいれなければ、 ちようど、これが石の帯梁にのることになつて、合理的に解決さ をみると、その幅 4.60m である。これをF尺度に換算して完数 のところに於いても正しさが証明されてくる。即ち、入口の開き 柱身を以てする棚高の計算にあつていると見てよい。又これは他 り(4F (基部)+12F (最初の帯梁の上端)+2F(アーキトラーヴ) あるから、その位置は柱頭を加えた柱の高さと一致する。かくて、 口幅が大きいところから見て、 を求めれば 14F ((4.5808m) となる。古代の入口の開口面が通 加えて、 =18F)、上層は、アーキトラーヴを同じ高さとして更に 12F を たてよこ 2:1 の均合を有しているから、この入口の開きの 床から 30F の高さの棚になる。かようにして、これは 下層の棚は床から 18F の高さにあ 相当重量の石であつたであろう。

の採光の問題であり、同時に、これは中央空間に於ける明るさの更に考慮すべき問題がある。即ち、棚によつて三分された空間層上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の高さは Kallima-上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の高さは Kallima-上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の高さは Kallima-上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の高さは Kallima-上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の高さは Kallima-上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の高さは Kallima-上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の高さは Kallima-上端に略々一致してくる。何となれば、玉座の部は玉座の椅子の示していた。この棚は像の膝高に一致し、上の棚は玉座の樹子の緑光の問題であり、同時に、これは中央空間に於ける明るさのの採光の問題であり、同時に、これは中央空間に於ける明るさのの採光の問題であり、同時に、これは中央空間に於ける明るさのである。

存する窓からしても、当然、窓による採光が考えられる。その窓 それぞれ、別に採光が考えられていたろう。ビザンツ聖堂遺址に の作業を考えれば、それは尚更である。こゝの三階層の空間には 出壁がありー 室に於いては決して十分ではない。殊に前室との間に間仕切の張 得られたことは勿論である。しかし、こゝからだけの採光では主 問題でもある。入口の開口面が異常に大きく、こゝからの採光が 更に三本を加えて計六本の帯梁が壁体を一層強固なものにする。 居となした。そうして直接そこに窓がおかれる。一方、窓の楣石 間に、更にそれぞれ、一本の帯梁を通して、これをそのまゝ窓敷 てあつたとは考えられない。それよりも高く離れて設けられてあ の開口面はたて 1.22m 乃至 1.23m である。窓は棚床に直結し になるからである。 (20) おかれていったから、 又窓の数は片側で少くとも九個、南北両側面で一八個が想定され 縁のゲイソンと小屋梁の受けになつているからである。かくて、 る帯梁には殊に好ましい結果が生れた。即ち、こゝでは帯梁が軒 する。同時にそれは、壁の最上縁を恰も頭貫の如くにまわつてい おき方は恰も、棚梁の受けとしての帯梁が強化されたことを意味 は、その上の帯梁の直下におかれるのである。このような楣石の つたろう。Mallwitz はかくして、棚梁を受けている帯梁相互の それは窓が内部の列柱軸に対して、それぞれ、柱間の中央に -左右壁端の間が 7.20m 開いていても-片側で、 一階層に三個、上下三階層で九個

最後に、工房の屋根組について考察されなければならぬ。何と

オリュンピアのプェイディアス工房

(六四七) 八七

史

る。この例を以てすると、工房の幅は約倍になるから、梁材も凡(36) れてあつた。この梁の太さは 74cm (詞)×66.6cm (函) であ り方は、この場合、非常に無理であるからである。即ち、主室の るような小屋組、即ち小屋梁に束をたてて棟木を支えるというや なれば、切妻屋根には相違ないが、ギリシア建築に通常、 の例によると、約6m幅の身廊に 3.30m 間隔毎に陸梁がわたさ かつた。その上、前室では、奥行 10.340m にわたつて、 の高く広い空間に架している梁と屋根を支えることは考えられな 内部支柱は細く、その柱礎は浅く、これが高 13.088m 幅 12.270m 広いスパンに支柱なしに梁を架したと考えられる例がある。即ち、 1m 角を超える梁は有り得なかつたのである。しかし、他方では、 そ倍の太さが要求されてくる で あろう。しかし、古代に於いて かは、今日から見れば驚くばかりである。Philon の Skeuothek ア建築に於けるこのような屋根組に、如何に太い梁が用いられた を受けなければならなかつた。これは非常に無理である。 全くなかつたのであるから、高 13.088m の周壁が直接、 えられてくる。そうして、これならば、浅くて細い支柱の問題に にスパンの大きい工房に於いては、トラス梁の屋根組が当然、考 いスパンに梁を架するのに、支柱がなかつた、しかも、その梁は オリュンピアの Gela の宝庫の例であつてこゝでは 9.68m の広 この例を以てすると、工房の幅は約倍になるから、梁材も凡 角であるから、通常の小屋組の梁としては軽すぎる。 は、 とゝでトラス梁構造を有り得たものとして主張して かくの如き例が既にあつたとすれば、これよりも更 柱列は 屋根組 ギリシ 見られ A. T.

(六四八)

ある。 も関係なく、 支柱のない前室の問題も等しく解決されてくるので

() らのみで十分であつたろうか。Mallwitz はこゝに於いて、間仕 ある。 切壁の張出幅に注意する。この張出は主室の棚柱よりも出ていな 上もなく便利であつた。しかし、他方、主室に於ける採光は窓か 採光で十分であつたのである。その広い開口面と外開きとはこの て、作業棚を必要とするものではなく、床上のみに於いて行われ とは勿論であるが、前室に於ける作業が主室に於けるのとは異つ 主室に於けるような柱列がこゝで全然見出されなかつたによるこ 7.50m以上の楣がおかれなければなるまい。 た。何となれば、扉を設けるとすれば、両壁端の開口面に応じて れたけれども、それを区切る間仕壁の間には扉が設けられなかつ を物語つている。それ故、作業の要請によつて前後二室が設けら るものと考えられたからである。それ故こゝでは正面入口からの 車や誘導台車の便をも兼ねて、陸梁が両壁の上におかれただけで 室から光を奪うことになつたであろうから。復原に於いては、滑 正面入口からの採光が主室内に於いても極めて必要であつたこと Mallwitzの復原では、前室に窓が設けられなかつた。これは、 それ故、この両壁端の開きは 7.25m もある。このことは、 これは、 いやでも主

とゝに於いて、復原構想は基本的に組立てられた。建物は前

られて、日乾煉瓦壁の弱体が補われたのである。(32)は、棚及び窓と構造的関係を持つた石の帯梁が周壁に均分にいれ た。これは、小屋組を三角形トラス構造として解決され、他方で と相俟つて、屋根構造と壁体構造の復原を極めて困難なものにし である。しかし、この二室相互のプランの相違は、著しい天井高 室の如き支柱列もなく、棚もなく、たゞ高い壁で囲まれただけで から、 室に於ける作業と異つて、床上の作業のみが期待されていたから あつて、採光も正面入口からのみであつた。それはここでは、主 を直接に期待している。このために、入口の開口面は異常に大き じ大きさの台座がおかれた。両側の棚では、それぞれ、側壁から ゝに扉が設けられなかつたのも、このためであろう。前室には主 窓を通して採光が図られている。中央部分は正面入口からの採光 台座の大きさに呼応していて、それよりも高さは低いけれども同 ている。この支柱列に囲まれた中央部分は、ちようど神殿内陣の の二室に分かれ、後室が主室をなしている。主室には作業の必要 **扉は外開きになつていた。又間仕切壁端の開きも大きく、こ** 左右両側に二段の棚が設けられ、それを二列の支柱が支え

(17) 基礎積は敷地が北から南に傾斜しているのに応じて、北壁の基礎は浅く、 手積の層の奥行きは 1.80-2.00m 小口積はつなぎ石として大きさは幅 57-ないが、最が著しく内側につき出している。各層共、石高は平均して 33cm 長 58cm 長さ 1.70-1.80m である。 では層毎に出たり引込んだりしているわけであるが、最上段の石が揃ってはい 南側の五層は下から上に向って約6—9cm引込んでいる。そうしてこれが内側 壁の基礎は深い。即ち北側では二段積であって、南側では五段積である。との

オリュンピアのプェイディアス工房

於いてのみ認められ、決して一般ではない。南側隅柱では石ごとに基礎と鎹止 めになっている。その他では南側東寄りの柱の各二枚の石が2狀鎹止めになっ って通常は単に基礎にぶっつけていった形で満足している。鎹止めは隅の石に こんでいるのが認められるだけである。楔形つぎ目のあるのが一ケ所だけであ い。積石造ではあるが小口、長手の交替はとゝで見られない。基礎との連結は までとびだし、北側では一東のを除いて一僅かに 1.50-1.60m しか出ていな 礎と同じ様に階段狀に作ってある。Orthostaten に対しては南側では 2.70m 9.25m 本づつということになる。その長辺に於ける間隔は隅 に 向っ て は 8m, 中は 附してあるわけであるが、隅では隅を形成している両側からうたれている。そ れ故、東西の短辺では隅に各々一本づつ、南北の長辺では各々、隅をいれて四 様に揃っているわけでなく、たゞ最上段の切石が深さ 10cm まで基礎に喰い 基礎積強化の為に附した控柱は南北両側の基礎に外にとび出した形で、四 各々幅 1.65m-2.00m を有して、基礎と同じ深さで埋めこまれ、基

ためにしていて、控柱の頭もこれでおおわれている。 基礎外側のたゝきは拳大の石を厚く敷き込んでその上に 2cm 厚さで漆喰か

のは、それが汲水用であったためかとも考えられる。(Mallwitz, a. a. O. s である。この溜の用途は、汲水用か除水用か不明であるが、東側の溜が大きい で一つ、東西両側でそれぞれ二つの溜が附設してある。とのうち東側のが最大 それが南の隅ではちょうど 2.00m の間隔になっている。更に排水溝には北側 離れている。しかし東側では北の隅で 2.10m 以上も建物から離れているが、 に走っている形であるが、西側では Toichobat から約 35cm、 北側では 40cm 排水溝は長さの異る Poros から作られていて、幅 48cm。建物を廻って南

(18) Toichobat は Orthostaten の外づらよりも約 6cm 出ているが、東側だ (つら) を揃えているが、内 側では揃えていない。石が互に鎹止めになって の大きな石板がおかれている。との隅の石もその他の石も建物の外 側で は 面 そのつなぎ石の長さは 1.30m を超えない。しかし、隅では 1.85m×1.70m いる。Toichobat はつなぎ石として隅に至るまで規則正しくおかれている。 けは別であつて、こゝでは出方が不揃であって、最大は 15cm 以上も出て

(六四九) 八九

Orthostaten は内外両側から切石を合せて作っているが、これがその儘壁の厚みになっている。その厚さは凡そ 1.12m。隅に 於ける 石の合せ方は内外の厚みになっている。その厚さは凡そ 1.12m。隅に 於ける 石の合せ方は内外の厚みになっている。のない。それは内外腹合せの Orthostaten の上に笠石としてのっているのであるい。それは内外腹合せの Orthostaten の上に笠石としてのっているのであるから。それ故、石の奥行きは 1.15m、内側の面は Orthostaten とぞろにつながっているから外側では約 3cm 出ばってくる。この層も亦鍵止めになっていなから。それ故、石の奥行きは 1.15m、内側の面は Orthostaten とぞろにつながっているから外側では約 3cm 出ばってくる。この層も亦鍵止めになっていなから、隅では特別の配慮が必要になってくる。即ち隅の相路接する石を、内側の隅と外では特別の配慮が必要になってくる。即ち隅の間を作る為に約 60cm の正方形のが他のと合わなくなる。そこでこの外側も規則正しさを得てくるわけである(七石を間にはめこんでいる。かくて外側も規則正しさを得てくるわけである(七石を間にはめこんでいる。かくて外側も規則正しさを得てくるわけである(七石を間にはめこんでいる。かくて外側も規則正しさを得てくるわけである(七石を間にはめこんでいる。かくて外側も規則正しさを得てくるわけである(七石を間にはめこんでいる。かくて外側も規則正しさを得てくるわけである(七石を間にはめこんでいる。かくて外側も規則正しさを得てくるわけである(七石を間にはめこんでは、21ff)

(六五〇) 九〇

(Mallwitz, a. a. O. s. 24-25),(Mallwitz, a. a. O. s. 24-25),

ン Toichobat の水平面の開き(傾斜度)は北側では東西両端の間で約 4cm(北東隅 ∇ -3. 22, 北西隅 ∇ -3. 26. ∇ -3. 26. ∇ -3. 27. ∇ -3. 27. ∇ -3. 28. ∇ -3. 29. ∇ -3. 29.

内部空間の内法寸法の約 7cm の差は南壁の歪み 8.5cm と合わないように見えるが、これは北壁の歪を小さくして、調節しながらその差を縮めたもので見えるが、これは北壁の歪を小さくして、調節しながらその差を縮めたもので点ではれる。これが規則正しくはないが、中央に至るまで 8.5cm の開き水ら同様に七番目の石までは小さいが(0,00cm から 3,5cm まで内にはいる)八番目の石で大きく割れて(東よりも西の方が明瞭)と 1 では既に 6,3cm 直派からはなれる。これが規則正しくはないが、中央に至るまで 8.5cm の開きに達するのである。基礎の最上段ではその両端を結ぶ直線から概算 6cm はつに達するのである。基礎の最上段ではその両端を結ぶ直線から概算 6cm はつれている。

a. a. O. s. 25-26.)
a. a. O. s. 25-26.)

石の形は略々正方形、一辺の長さは凡そ 0.90m であって、それを出ない。しているのは、これだけである。一列四基づつ建物の長軸に平行に並んでいる。礎ている八基の柱礎がみられた。附設部分で当初の建築に属するものとして残っている八基の柱礎がみられた。附設部分で当初の建築に属するものとして残っているのでは、

2,805-2,815-3,180 (すべて内法寸法である)) しかし、実際には、柱を礎石 2,34m 南側は 2,27m から 2,30m になる。列軸の延長はそこで、間仕切壁 1,85m から 1,815, 北側では逆に 1,88m から 1,90) それで、もし柱が礎石 とれも柱の据え方を少しづらせば、柱列間の心心幅は東西共に略々 7,60m に の建物の内法幅に於ける 7cm の誤差を修正しようとしているように見える。 も西の壁とも結びついていなかったとしなければならぬ。又身廊幅も礎石間で という復原の問題にとって非常に大事である。アーキトラーヴはこの張出壁と なる。しかし、このことは列柱の上にのるアーキトラーヴをどこまで 廻 すか の中心に据えられた すると 側廊幅は列軸 で 測って、北側は 2,32m から ら東にいく程狭くなり、北側列ではそれが広くなっている(南側では最大間隔 の中心からづらしてたてるととによって理論的間隔 3,683m が可能であった。 北側列では 3,23m—2,75—2,85—2,795—3,240 南側列では 3,23m—2,77— しようしとている。(礎石間隔は西の壁から測って、次のようになっている。 約 8cm 西に寄っている。そとでそれより東の礎石ではそれだけ多くして調節 と壁との間の開きよりも小さい。又例えば、北側列の西から第二番目の礎石は づである。とういうととはかまわなかった。即ち礎石相互の開きは列端の礎石 石との間隔と手前の間仕切壁とその前との間隔は礎石幅の半分だけ広くなるは であった。ところが礎石だけ相互の開きを正確にすると、奥の壁とその前の礎 かに奥行 18,415m の空間を等間隔に平均 3,683m の五柱間に分けるつもり ▽-3,426m)。礎石を一列四基づゝ他の列と向い合って据えてあるのは、明ら えば、北側列の西から二番目のは ∇−3,256m 南側列の間仕壁の そ ばの は 土に達しているわけではないから、南側列のものの方が沈下度が大きい。(例 あるといった調子である。両方共に平に据えられているが、下方の礎石は自然 かし、それは同大同形の石を土台にしてのっているから恰も礎の上 に 礎 盤 又南北両壁と柱列との開きの狂いはとれ程著しくはないが、南側列では西か ---それは 2,50m を出るか出ないかである---にどうやら合うことに 東は 6,73m であって、その差は僅かである。これは(註記2)

切込がある。とゝに北の框がはまっていたろう。軸受孔は抱きから 20cm も22) 北側抱きのところに寄って、しかも軸受の孔の後ろに 5×3.5cm の方形の

張っている黒色の層は最後の時代、即ち末期古代に属するわけである。そと 層位の上面(∇ -3,55m)は十分平らになっていないがとの上にローマ時代のその上に、磔や Poros 石粉や Poros 砕片をまじえた砂の築土がある。この 摺石は外側に 出るよりも 内側に著しく 引込んでいる。又内側で 著しく丸くな 出されない。そこで 両開き二枚扉は 外に向って 広くあいたもので あろう。沓 離れているが、殆んど外の方に寄っている。沓摺乃至敷居には何らの止めも見 の床面が外よりも低くしなければならなかったかは、今だによくわからない。 板の舗床であったという見解に達した。床面がもっと高かったか、又床下がも で床面は ▽−3,55m から ▽−3,65m に相当する高さであって、Poros 石 紀の Kladeos 川氾鑑を物語るものである。の上のビザンツ聖堂の陶片舗床を 土層になっているが、これはローマの客殿址で周知のものであり、又紀元四世 至崩壊層でおおわれている(その上端は ▽-3.30m)。この上は多量の純粋砂 煉瓦片のそれ程強くはないが厚い破片層があり、これがもっと後世の築土層乃 も窺われる。即ち最下層は例の南に向って傾斜している地山の砂土層である。 の縁から約 30cm 下であったと思われる。とのととは又、層土の工合を見て **最上段の上端のすぐ上だったと思われる。柱礎の関係からみると床面はその上** って削ったようになっている。いろいろな点から考慮して、床の水準は基礎の っと硬かったかということを示す調査結果は 何一 つ な い。そこで何故に内部 (Mallwitz, a. a. O. s. 32ff).

(23) Pheidias の脳裡には風に神像の姿が具体化していて、当然工房建設にはこれが働いたと Mallwitz は確信している(a. a. O. s. 95, s. 102 の記述はこの好例である。)又、最近、 Evelyn B Harrison はオリュンピアのゼウス神像の像容が早くから Pheidias に於いて具体化していたと見るべきことについて、重要な示唆を与えている。即ち、彼は Parthenon 神殿東破風の女神アテナの誕生に於けるゼウス像にオリュンピアのゼウス像のリハーサルを見ようとしている(E. B. Harrison, Athena and Athens in the Pediment of the Parthenon, in the American Journal of Archaeology Vol. 71, No. 1, 1967 p. 32, Note 40) ——"Whoever may have executed the marble Zeus for the Pediment, it is most likely that Pheidias himself designed it. In some ways it will have been a rehearsal for

オリュンピアのプェイディアス工房

- (2) オリュンピアのゼウス神像の法量は R. Pfeiffer のカリマコス研究によっ Hellas und Rom, 1949, s. 117; Mallwitz, a. a. O. s. 1 Aum. 1; s. the Journal of Hellenic Studies vol. 61, 1941; K. Schefold, Orient ラス頭部 5Eであって、これは 25E になる。これに示された椅子高と像高の に生れて、前二四五以後に亡くなっている。生涯の最盛期は前二六四以後であ 75)カリマコスはキュレネ出身、生歿年は精確を欠いているが、前三〇〇以前 である。 (R. Pfeiffer, The measurment of the Zeus at Olympia, in 比が Elis 古銭の図と一致することになって、古銭の正確さが証明されたわけ であるが、残念なことに椅子の奥行きは記されていない。像高は椅子高 30F プ ある。これによって椅子高、像高、ホーライ像高、台座寸法等が与えられたの て明らかにされた。Schrader の Pheidias 研究はこれを知らなかったので めてこれを二巻に纏めたのである (Callimachos, ed Pfeiffer, Oxford, よると八〇〇巻以上になるというが、多くは失われた。 Pfeiffer は断章を蒐 作成をまかせられた。自らも古典研究、作詩をなした。その業績は Suida に ス像の法量は Pfeiffer の I. 189, Frgm. 196. 1949, 1953) —Lexikon der alten Welt, Altemis 1965, 1472—1474. 누호 って、アレキサンドリアにて Ptolemaios II によって図書館の整理、型録の
- 1E を 490.8mm となした。オリュンピア尺度、即ちスタデイオンの長さ192,25m の 1/600 を 1F (320.4mm)とするのは、既に Adler が工房基礎を 45:100F として採用したところであるがこれは今回の実測値(Orthostaten で 14,575m:32,180 と合わないし又 オリュンピアのヘラ神殿に於いても、ゼウス神殿に於いても必ずしも適用されない。ペイドン尺度は Armin von Gerkan の計測値では一足長(F)326.88mm (Wiener Jahreshefte 32,1940,127ff) Dごrfeld では 327mm(Olympia II 19)であって、Mallwitz はパルテノン、スニオンのポセイドン神殿、アイギナのアパイア神殿に 327.5mm を単位として用いた。(Mallwitz, a. a. O. s. 76 Aum. 4)

(六五三) 九二

6,65m (Olympia II. 13f) 奥行 9,93m (Olympia II. 14. 但し Forback る。旧発掘の際の実測では身廊に舗かれた大理石舗石から測って台座寸法を幅 30F:20F である。同様な計算でこれは 9,816m:6,544m となる。ところで の僅小誤差である。カリマコス によると神殿内陣におかれた神像の台座は 十35) であって、それぞれ 29,857m であって実測値 29,875m とは 1,8cm を合せた内部空間は肘長で $60^5/_6$ E(37 $^4/_2$ +23 $^4/_3$)又は足長で $91^4/_4$ F ($56^4/_4$ の差は僅小であって、2,9cm 乃至 0,55cm にすぎない。前室、間仕切、主室 壁 1.12m があるわけである。前室を 31º/sF(10,3613m)とし、又 21¹/1eB Mallwitz のペイドン尺度をあてはめると 25:37¹/₂E 又は 37¹/₂:56¹/₄F は(12,27m:18,415m) はそれ自身ほぼ 2:3 の比を示していて、これを ではなぐ)尺度計測の基礎になっているとする。そうすると工房主 室の 空間 彼は、工房建築に採用された尺度は、ゼウス神像の尺度と一致し、又それはゼウ となってしまう。ところがこの単位は他の建物に於いて証明されない。かよう れをカリマコスのいうところに従えば、F尺度単位は 332mm 乃至 331mm は Alt-Olympia I. 233f に於いて 9,67m となした)としたのであるから、こ は身廊幅一杯におかれてあったのであるから、ちょうどびったりするわけであ 今回の実測で内陣幅員は13,08―09m, 身廊幅員は 6,54―55m である。台座 11,4575m)と前室プラス間仕切壁を 35F 又は 23¹/3E とした場合とではそ (10,3375m) としてこれに間仕切壁 1,12m を加えた場合 (11,4813m 或は になるわけである。又前室は 10.34m の奥行空間であるが主室の間に間仕切 ス神殿に於いて同様に仮定され得るとする。そうして建物の内法空間が(外周 にして Mallwitz はF尺度単位を 327.2mm としてこれを復元の基準尺度と したのである——Mallwitz, a. a. O. Antikes Baumass s. 75ff

- (원) Olympia II. s. 100, Malwitz,a. a. O. s. 79
- (27) Mallwitz, a. a. O. 85ff.

るとは考えられないで、棚に想到するに至ったと思われるところがないでもなに属すると考えられる。なかでも柱身の性質からしてそれが屋根組を受けてい礎と同一の貝殻石灰岩から出来上っているものが見出されて、この工房の建物と、ではアーキトラーヴを除いて、柱身の鼓胴及び柱頭共に、礎石及び建物基のではアーキトラーヴを除いて、柱身の鼓胴及び柱頭共に、礎石及び建物基のではアーキトラーヴが重要な資料を提供する。

い。柱身を形成する鼓胴は殆んど主室内で見出されて、短身のも(50cm を殆れ、と出ない。これは二一個を数えローマ時代の改造に属すると考えられる。a. O. s. 38 Abb 14)と長身のもの八個が現存しているが、この後者の方が重要である(a. a. O. s. 39 Abb. 15)現存の情態に於いて高さは 1,435m エンタシスは非常に小さく過減率 2.5cm, 1m 当り 1,75cm, 完全なら深さ 16cm,8×8cm 角の柄孔を有することになろう。現存のものから推せば下辺径は 58,6cm 以上には出ない。現存鼓胴のそれぞれの柱身内の位置(一本の柱 を形成するとしてその柱のどの部位にあて は まる か)は比較的太いもの一個 で下方径 55.8cm,上方径 53cm, 丈 1,461m 整理記号 \mathbf{g})を除いて 3 $\mathbf{-}$ 6m の間に位置すると理論的に考えられる。その太い方のはそれよりももっと低く 位置していたであろう。かくて柱の高さは理論的に最低 7,50m と考えられる のである。(a. a. O. s. 89ff, Abb 34 $\mathbf{(s. 91)}$)

柱頭については工房北側に於いて見出されたもの一個(柱身接合部丈25.8cm 柱頭については工房北側に於いて見出されたもの一個(柱身接合部の径が 50cm を超えることなく、又 40cm 以下でもが注目され、柱身接合部の径が 50cm を超えることなく、又 40cm 以下でもがという注文に合致している。アバックスの厚味は 10.5cm 乃至 11.0cm である。(a. a. O. s. 87. Abb. 31 u. 32.(s. 86))

柱頭、柱共にドリス式、但したて溝はない。

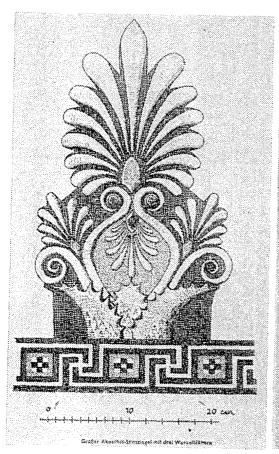
- (28) アクロポリス丘のプロピュライア中央扉口は幅 4,185m 高 7,378m その両隣は幅 2,926m 高 5,403m である。又両脇の入口の開きはこれよりもやュ細長くなって 1,472m:3,440m である(R. Bohn. Die Propyläen der Akropolis zu Athen 18 Taf. 8) エレクティオンの北扉口は幅 2,427m 高 4,882m である(G. Ph. Stevens, The Erechtheum Taf. 25)—Mallwitz, a. a. O. Aum. 35 a. s. 91.
- 幅も 1,07m から 1,257m の間を動いている。但し壁基礎(腰壁)の石組のおえの納り工合を示している。高さは 1,225m から 1,257m の間を動き、抱体えの納り工合を示している。高さは 1,225m から 1,257m の間を動き、抱体えの納り工合を示している。高さは 1,25m から 1,22m の間を動体えの納り、近壁堂入口のために壊されている。幅は 1,05m から 1,22m の間を動体を 1,22m の間を動物を 1,25m から 1,25m の間を動物を 1,25m がら 1,25m の間を動き、抱める 1,25m から 1,25m がら 1,25m がら

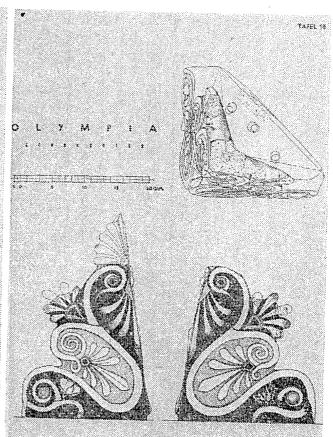
ろう。Mallwitz, a. a. O. s. 29f. Abb 11 a. s. 30. 程、縮減していたものと思われ、この抱石は恐らく一番上層の窓であったのだ示している。これは一つの示唆を与えるものであって、壁体の厚みが上にいく示している。のえば南壁の東寄り最初の窓の抱石は幅 1,07m 乃至 1,08m を上に転用された抱石があるところからして、抱石はかれこれ転用されていると上に転用された抱石があるところからして、抱石はかれこれ転用されていると

- (3) EleusisのPhilon 彼は前四世紀後半のアッテイカの最大の建築家、特に Pei Greek Roofs. Cambridge 1960. p. 44) 又プリニウス (n. h. VII. 125) もこれを記し、われわれは、IGII. 1054 た。彼はこの建築の記録を造したが今日では残っていない然し、ヴィトルヴィ の格納庫として巨大な空間を包む特殊な構造を有する建築として有 名で あっ は Chaironeia の戦の頃、恐らく前三三〇以前に建てられたもので軍船用具 Prostoion(前廊)の建設者として古くから名高かった。なかでも Skeuothek raieus (ピレウスのこと) の Skeuothek 及び Eleusis の Telesterion の が支えている。そうして陸梁はこの母屋桁の位置で渡されていたの で ある。 であった。屋根は緩い切妻であって、その構造は母屋桁を直接、内 部 の 列 柱 高さ 30F の円柱が小屋梁を支えている。但し天井ははってなく化粧屋根裏 A, 1 s. 516) 建物は概畧長さ四プレトロン(約123.3m)外周幅55F の柱廊ホ encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft XX, 1.56; III (1883) 147 等の研究によってこれを再現することが出来る。(Paulys Real Keil, ibid XIX (1884) 149, Dërpfeld, Athenisch. Mitteilungen VIII イスはこの建物を記載し (VII. Praef. 12 森田慶一訳、生活社昭一八 s. 239) (Dörpfeld, ibid. Taf VIII. A. Trevor Hodge, The Woodwork of ていた。身廊は幅 20F, 周壁の高さは腰基礎を除いて 28F 柱頭をいれて、 ール形式の建物であって、一列三十五本の円柱が二列に並んで三廊形式に分れ (1668) の詳しい記載又 Fabricius, Herm XVII (1882) 545—594 同じく
- (31) A. T. Hodge, ibid. p. 41-42. によれば三角形トラス聚構造は勿論ギリ(31) A. T. Hodge, ibid. p. 41-42. によれば三角形トラス聚構造は勿論ギリジア本土に於いて創案されたものでもなく、又 Magna Graecia の植民地に早くかア本土に於いて創案されたものでもなく、又 Magna Graecia の植民地に

オリュンピアのプェイティアス工房

(六五三) 九三





A

THE REPORT OF THE PROPERTY OF THE PROPERTY

C テ ラ コ ッ タ 飾 瓦 A 隅棟アクロテリオン B 大棟アクロテリオン C 軒縁飾 Sima

五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。 五世紀初に南側に前室がつけられたのである。

A. M. Snodgrass (The Journal of Hellenic Studies, vol. 85, 1965, p. 239) は Hodge 説に多分の疑問を持ち、従って Mallwitz の工房屋根組のトラス説に反対している。

(32) 天井ははられてなく又内部の床は poros の舗石床であったと考えられている。屋根は緩い切妻屋根であってテラコッタのコリント系平瓦で葺かれて、軒であって年代的に凡そ前四三〇と比定される(Mallwitz, a. a. O. Abb. 37 a. s. 112, Taf. 14,15,38,39) その他工房屋根を飾っていたものとして、アカントス棕櫚葉文のアクロテリオン(a. a. O. Taf. 17,44) 花文を配した棕櫚葉文棟瓦(a. a. O. Taf. 49(3)) 棕櫚葉文隅棟アクロ テリ オン(a. a. O. Taf. 18,50,51) が挙げられる。

作開始時期を略々定めることができる。(a. a. O. s. 110ff)(九四頁挿図)とのようなテラコッタの装飾文瓦によって、工房建築の竣工時期及び神像制

III

に組立てられたと考えられることは必然であろう。 Pausanias木心乃至木心像がいくつかの分割作業で別々に作られてから後ちことは、周知の如くである。巨大なこのゼウス像の如き場合には、黄金象牙像はなかの木心に黄金象牙をはつていつたものである

オリュンピアのプェイディアス工房

の制作からであろう。
の制作からであろう。
の制作からであろう。
の制作からであろう。
の制作が五行程に分かれて行われたのであろうが、仕事して最後に黄金象牙の細工と張付け仕上げが行われる。このようして最後に黄金象牙の細工と張付け仕上げが行われる。このようして最後に黄金象牙の細工と張付け仕上げが行われる。このようも忙しくなり、工房が全回転されなければならないのは、木心像の制作からであろう。

て、 ることは、身体の比較的大きな部分、頭部、胴体、脚部の如きは うに、おおよその身体部分の形に、なかを空洞にして作られ、そ れには主室の床面が答えて、こゝで玉座が仕上げられていつたで に分れて、このためには最も多くの場所が必要であつたろう。そ 前室で制作されたであろう。玉座の椅子はいくつかの細かな部分 この段階では、前室も主室も十分に空いていた。そこで考えられ が作業場として使用されれば十分、間に合つたのである。作業も であつた。工房の設備はこれに十分に答えたのである。即ち棚床 あるから、熟練した職人を多勢使つて、像の各部に応じて、一斉 た。これは作業としては芸術的作業であるよりも、工作的作業で に始められたであろう。それ故、このためには広い仕事場が必要 の上に彫刻の仕易いように杢目を合せて厚板が矧合されて いっ 木心像の制作には、既に記したように Mallwitz 先づ木骨枠組が例えば、胴体の如きは、船体の竜骨組立のよ の見解とし

(五五) 九五

思われる。 思われる。 思われる。 思われる。 思教の組立で像の比較的高いところに接合していかあろう。又、最後の組立で像の比較的高いところに接合していかあろう。 思ち、手とか腕(第一、第二の)とかの脇

ばの棚でこれが修正されていったであろう。 がようにして制作の事実上の最初の段階で棚は欠くべからざるかようにして制作の事実上の最初の段階で棚は欠くべからざるかようにして制作の事実上の最初の段階で棚は欠くべからざるがにの棚でこれが修正されていったであろう。

部分は、一つ一つ神殿に運ばれていつて、そうして内陣内に最終知が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。木彫技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。本野技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。本野技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。本野技術が木心に対してどの程度に行われたかは、が施される。本野技術が木心に対してどの程度に行われたかは、

る。
て全像が安置されて、その容姿が最終的に吟味 され た と思われて全像が安置されて、その容姿が最終的に吟味 され た と思われ的に全像が安置されたのであつた。勿論、この前に工房内に於い

紀に於けるゼウス信仰の高まり、大神ゼウスなる概念の発展を併 せ考えるならば、このことは自づから理解されてくるのである。 が工房にも記念的建築を求めたといわなければならない。前五世 では満足することができなかつた。大神ゼウスに対する畏敬の念 完遂していくという崇高な使命が、単なる仕事場としての仮設屋 題、即ち神々のなかの神、大神ゼウスの巨像の制作を間違いなく この建築の最初からの目当てではない。この工房に課せられた課 後)こゝが作業場として役立つたと考えられるけれども、これが 置された Leochares 作の黄金象牙像の制作には、(前三三八年以 的からではなく、――そうして事実、後ちの 後世にわたつて同様な仕事場として使用していこうという実用目 して建築されるに至つた理由でもある。ゼウス巨像の完成後にも の要求するところであつた。このことは又、工房が永久的施設と 備として石材を以て作られるに至つた理由があつた。これは作業 時的附設の足代以上の意味が棚にはあつたのであつて、恒久的設 このように、 棚は終始、作業について必要であった。 Philippeion に安 そこに

IV

の作である黄金象牙の巨像アテナーパルテノス神像との間に、何Pheidias のオリュンピアのゼウス神像については、同じく彼

31, 1959, 459ff) Plutarchos はこの裁判についで彼が投獄され が、略々前四三三乃至前四三二年とされる。(H. Bloch, Gnomon る年である。この訴訟審理の時日については必ずしも明確ではない えていたわけである。こゝにいう前四三六年というのは、ゼウス 体の構成が生硬であつて、未だ豊かなクラッシクの芸術を完成し Die grechische Plastik, s. 142—143) しかし、様式的には全 と平行して制作が行われたろうとするのであつた。(G. Lippold, 四五〇年頃に制作の依頼を受けて、前四三六年にほぼ完成されて たのであつた。G. Lippold は中間説をとつているかの如く、前 れが早く制作されたかについて、論争が繰返されていた。 又前四三二年というのは、アテナ パルテノス像の制作に不正行 年 Pautarkes の名を親愛をこめてゼウスの指に刻したのであつ る。前四三六年のオリュンピア競技に於いて優勝した Elis の少 像の指に刻されていた伝えられる πανταρκης καλός によつてい ていなかつたとしているから、この像を初期の作品群のなかで考 のであつた。そうして、この間一時的には、アテナパルテノス像 いるとなし、晩くとも前四三二年以前には出来上つているとする Langlotz, Thiersch, L. Curtiusの諸家は彼の後期の制作とし の初期の作品とするに反して、Noack, Poulsen, Buschor, Winter, Dinsmour, Schrader, Picard はゼウ像を Pheidias 為があつたとして Pheidias がアテーナイの法廷で裁かれたとす て、それは足代の取払われていない間であつたとするわけである。 獄中で病死したと伝える。又聞き伝えで毒を盛られたと伝え 即ち

choros (Schol. Aristoph. Pax 605; Overbeck, Die antiken Schsiftquellen 629) は、Pheidias が放免されて Elis に亡命し、こゝでオリュンピアのゼウス像を制作し、そうしてその後、し、こゝでオリュンピアのゼウス像を制作し、そうしてその後、Eis の人々によつて殺されたとするのである。Aristophanes Pax 605—610 はこれに関して、Pheidias が災難のとばつちりを受けたとする。これは恐らく事実であつたろう。そうして 彼を受けたとする。これは恐らく事実であつたろう。そうして 彼り中heidias に忘恩的仕打ちをなしたかどうか。Pausanias, IV, 14—4(5) に於いて Pheidias の子孫がゼウス像のお守りをするとして、従来、論争の定まるところがなかつたといつてよかろう。して、従来、論争の定まるところがなかつたといつてよかろう。与え得たものと思われる。

されているところからして、この時には、恐らく工房は竣工に近づりましたのである。即ち前四四〇一四三〇の十年間がこれに相当限定したのである。即ち前四四〇一四三〇の十年間がこれに相当限定したのであるが(本稿註一五)、われわれがもし一層これを限定するわけであるが(本稿註一五)、われわれがもし一層これを限定をあるが、本稿註一五)、われわれがもし一層とれを限定をあるが、本稿註一五)、われわれがもし一層とれを限定をあるが、本稿註一五)、との建設年代をより明瞭には、この建設のための最初の盛土層(D層)から出土した Pheidias

オリュンピアのプェイディアス工房

(六五七) 九七

いていたにしても未だ完工してはいなかつたろう。この東側地帯の整地に引つゞいて南側地帯の整地が行われたはづであるから、ことから出土した双手黒釉平盞が前四三五年を下らないとすれて、Pheidias 小坏の土中したのは恐らく前四三五年頃であろう。 は、Pheidias 小坏の土中したのは恐らく前四三五年頃であろう。 は、Pheidias 小坏の土中したのは恐らく前四三五年頃であろう。 が、Pheidias 小坏の土中したのは恐らく前四三五年頃であろう。 る破風軒飾の棕櫚葉草花文のテラコッタ Sima は前四三〇年頃をる破風軒飾の棕櫚葉草花文のテラコッタ Sima は前四三〇年頃をる破風軒飾の棕櫚葉草花文のテラコッタ Sima は前四三〇年頃をる破風軒飾の棕櫚葉草花文のテラコッタ Sima は前四三〇年頃をる破風軒飾の棕櫚葉草花文のテラコッタ Sima は前四三〇年頃をおしているところからして、この頃、建築は完工に強力であるからである。

もし以上の如くに考えられるならば、Pheidias は何時頃からもし以上の如くに考えられるならば、Pheidias は何時頃からりにしなければならないとすれば、この際、Pantarkes の伝説りにしなければならないとすれば、この際、Pantarkes の伝説がこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasがこれを伝えていないのは疑問を残しているが、同時代のPausaniasはいるところであるが、同時代のPausaniasは不可能である。というには、Pheidias は何時頃からないのである。

ても、 menos が とになったのであろう。 職人がこゝにきて、そうして Elis の工人達と共に仕事を励むこ けにはいかない。恐らく、前四三五年頃には多くのアツティカ系 坏と共に Kleophon 画家の陶片が出土している事実を見逃すわ アに於いて建設にはいつていつたであろう。 Pheidias 自身の小 はなかつたかもしれないが、恐らく彼の腹案の如くにオリュンピ Elis に赴いたのであろう。それはオリュンピアの制作ばかりで テナ パルテノス像の完成は前四三八年であつたからして、これに 彼はオリュンピアに滞在していたとして恐らく差仕あるまい。ア オリュンピア滞在説は更に有力となつてくるであろう。何れにし の余地を残しているが、もし、そうだとするならば、 ことに注意すべきであろう。尤も Pheidias の作品 は異つて、遥かに道徳的な美しさの意味を含めて使用されていた たであろう。われわれは kallós の語が前五世紀に於いては後世と つづいて、 Pheidias は恐らく既に交渉のあつた制作の ために Pheidias 小坏とかみ合せて、たとえ、一時的であつても Pantarkes の像であつたかどうか、尚お多くの考慮 前四三六年の Anaduo-

の黄金象牙像は同じく Pheidias の制作であるが、彼の晩年の様れていない今日では、軽々に論ずべくもないが、出土の衣文土型れていない今日では、軽々に論ずべくもないが、出土の衣文土型中の襲褶によって これ を推 せば、 Parthenon 破風彫刻群に於いて示されたものよりも、更に豊かさを増しているように思える。 Pausanias VI, 25,1 の記している Elis の Aphrodite Urania せウス像の芸術的性格については、 Kunze の発表が未だなされていない今日では、軽々に論ずべくもないが、出土の衣文土型



レオポン画家)



型

豊かさに於いてこれを凌いていると見えるし、又その体勢に於け

の背面に於いて較べ得るが、Aphrodite Urania の方が遥かに 破風の所謂三美神とよく比較され得るであろう。特に衣文は相互

る運動の複雑さは、これまたより以上であろう。この像は Phei

式を研究する上に於いて見逃すことのできない作品であろう。

ルリンの左片脚を以て亀の首根を押えているかのように足をのせ

ているその像が、これのコピーであるとすれば、

Parthenon 東

か。

dias が

格を知る上に於て、これは恐らく、参考とす べき では なか ろう

Elis にきてからの作品であろう。ゼウス像の芸術的性

Messene の Damophon が象牙片の取換え修理を行つたのであ Pausanias IV, 31, 6 が伝えているゼウス神像の大修理である。 peion のための 井は埋められ、内部の舖床も剝がされてしまつたであろう。しか る最初の変化を告げるものであろう。即ち前五世紀の終末には、 種のなかに見出されたスキュポスは(本稿注15)、工房自身に於け た年代を示すものではあるまいか。そうして、工房内の井戸の埋 その新しいものは前四二〇―四一〇年を語っているとすれば(本 てはいない。しかし、所謂 Formenschicht 出土の陶片類が、 稿注15)、それは恐らく、制作の仕事も終わり、工房の清掃が行われ 工房発掘の資料は、直接には、神像制作が終つた時期を決定し その後も、この工房が使用されたと考えられるのは、Philip Leochares の黄金象牙像の制作であり、更に

九九

(六五九)

る。これは前二世紀のことである。工房はその後、ギリシア末期

からローマ時代に浴場施設を備えて、全くその性質を変え、遂に 聖堂として、改造され、遂に伝説のなかに包まれてきたのであつ 紀元後、恐らくそれは紀元五世紀にはいつてであろう。ビザンツ

た。

33 Mallwitz, a. a. O. s. 94ff

ているようにしたか、又木心に施された彫刻がどの程度仕上つていたかどうか 発表したものといえる。 るかにからわつているわけである。Mallwitz はこの点に於いて重要な見解を ということは明らかにされていなかつた。この問題は黄金象牙像を如何に考え 像の木心が分解し得るように制作されたことについては、従来諸家の意見が 致しているが、木心のなかを空洞にして作つたか、それとも一木的につまつ

ersch は土と漆喰の中間層をおいたとし(Nachrichten v. d. Akademie deutsch. Archiol. Inst. 5. 1890, 101f; G. Ph. Stevens, Hesperia 26. のである。Thiersch もきれいな仕上げをするには木ではうまくいかないと考 考え、それが表皮として最終的肉附を持つていた(Olympia。319)と考えた der Wissenschaften in Göttingen). Bötticher は中間層を蠟板からなると 1957, 361 はアテナ パルテノス像について同じ意見を出している)**、H. Thi** えたのである。 (Mullwitz, a. a. O. 97. Aum. 52,53) 例えば Puchstein は木心に直接、金と象牙をはつたとした(Jahrbuch d

部を木心から離して土製の体軀に据えたのであつて、その頭部は木心を組立て られたとするのである。 あるとする。(a. a. O. s. 100) それ故、木心は木彫技術を以て細かに仕上げ 材木がおいてあつたという。Mallwitz はこの記述のなかの半ば仕上げた上に ていた。しかも神殿の背後には、金と象牙をはつて仕上げるだけになっていた つた。それは金と象牙の頭部だけ完成していて、他の部分は土と漆喰からなつ ムいつた直後に直ちに、細かな造形的な仕上げを頭部から行つていつたからで 〉のしるしをつける、即ち(ギアレヒĕpፕロ)材木ということに注目して、完成の頭 Pausanias I. 40, 4. Megara の Olympieion にはゼウスの未完成像があ